

昭和新田遺跡

発掘調査報告書

1998

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

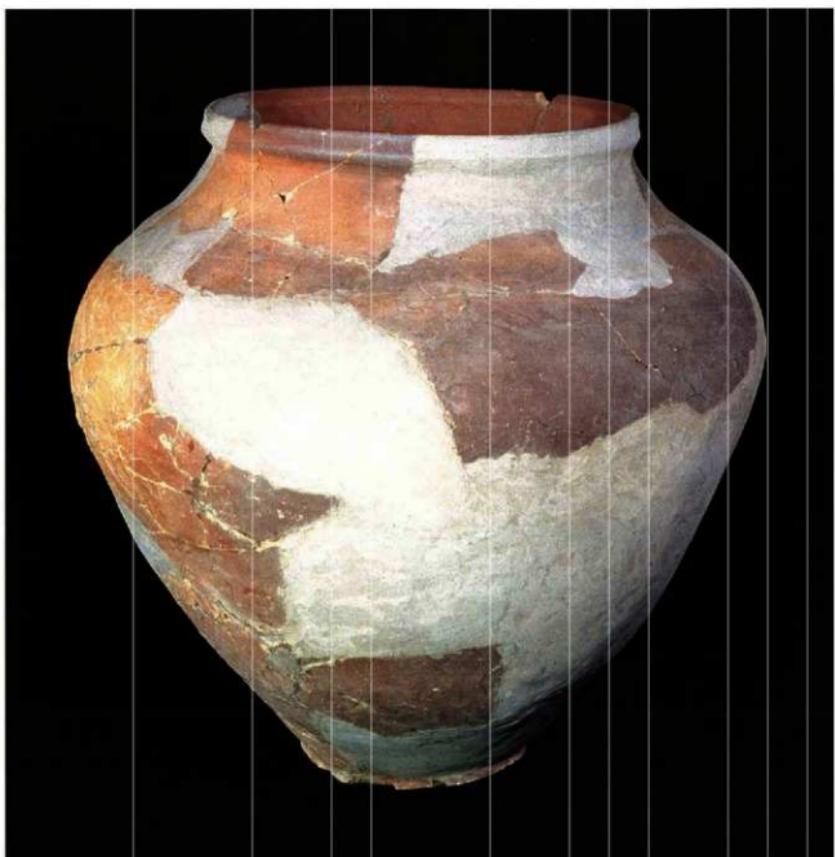
しょう わ しん でん

昭和新田遺跡

発掘調査報告書

平成10年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



S E 105出土瓷器系陶器 瓷

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査した、昭和新田遺跡の調査成果をまとめたものです。

昭和新田遺跡は山形県のほぼ中央部に位置する西村郡朝日町にあります。朝日町は西に磐梯朝日国立公園の一部を成す朝日連峰が連なり、中央を山形県の母なる川最上川が流れる自然豊かな里山の町です。

この度、平成9年度組手育成基盤整備事業（大谷地区）に伴い、工事に先立って昭和新田遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、平安時代の竪穴住居跡、平安時代から中世にかけての掘立柱建物跡、井戸跡、溝状遺構、土坑が確認されました。また、遺物として縄文時代のものと思われる石製品、平安時代の土師器・須恵器、中世の遺物として青磁の破片や瓷器系陶器壺が出土しました。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発、普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成10年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清耕

例　　言

- 1 本書は平成9年度担い手育成基盤整備事業（大谷地区）に関わる「昭和新田遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県農林水産部山形平野土地改良事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター
遺跡名	昭和新田遺跡（CAHSS）
所在地	山形県西村山郡朝日町大字馬神字北森
調査期間	平成9年4月1日～平成10年3月31日
現地調査	平成9年5月7日～平成9年7月18日
調査担当者	調査第二課長　野尻　侃 主任調査研究員　尾形　與典 調査研究員　佐竹　桂一（調査主任） 嘱託職員　宮地　文七 嘱託職員　渡辺　薰

- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県山形平野土地改良事務所、朝日町土地改良区、西村山教育事務所、朝日町教育委員会等関係諸機関の協力を得た。また報告書作成にあたって小井川和夫・菊地逸夫（東北歴史資料館）の両氏から資料閲覧の便宜及びご教示を賜った。ここに記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成・執筆は佐竹桂一、宮地文七が担当した。編集は尾形與典、須賀井新人、菅原哲文、豊野調子が担当し、全体については野尻　侃が監修した。
- 6 委託業務は下記のとおりである。

遺構の写真測量・実測	（株）アジア航側
遺物保存処理	山梨文化財研究所
- 7 出土遺物・調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次の通りである。

S T … 竪穴住居跡	S B … 掘立柱建物跡	S E … 井戸跡
S K … 土坑	E K … 遺構内土坑	S D … 溝跡
S P … ピット	E P … 遺構内柱穴	S A … 栅列
P … 土器	R P … 登録遺物	S … 石
W … 自然木	R W … 登録木製品	E B … 柱穴掘り方

2 遺構番号は現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記の通りである。

- (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は真北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、N-16°-Eを測る。
- (3) 遺構実測図は1/40~1/250の縮図で探録し、各挿図毎にスケールを付した。なお、実測図中の●は遺物の出土地点を表わす。
- (4) 遺構実測図の網点については挿図に凡例を設けたが原則的には下記の通りである。
砂目トーン…焼土　　縦線トーン…地山
- (5) 遺物実測図・拓影図は、原則的に1/3、1/4、木製品は1/10で探録し、各々スケールを付した。遺物図版は木製品を1/10とした以外は全て1/3、1/4の縮尺とした。
- (6) 遺物観察表中の計測値欄で()内のデータは推定値である。破片での現存値は省略している。出土地点欄の層位で「F」は遺構覆土内出土、「Y」は遺構底面出土を各示し、ローマ数「I~III」等は遺構を覆う土層（基本層序）を表している。
- (7) 遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とともに共通したものである。遺構挿図中に図示している遺物も同様であるが、一部現地調査段階での登録番号（RP等）も用いている。尚、遺物挿図及び遺物観察表中に、RP番号が1個体に複数明示あるものは、接合によって同一個体と確認されたことを意味する。
- (8) 遺構覆土の色調の記載については、1987年度農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。
- (9) 土器の名称については、素焼きの酸化焰焼成の土器を土師器と称し、ロクロ成形のものには、その都度文面・表中にロクロ使用の旨を記した。

目 次

I 調査の経緯	(宮地)
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1
II 立地と環境	(宮地)
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
III 遺跡の概観	(佐竹)
1 基本層序	6
2 遺構と遺物の分布	7
IV 検出遺構と出土遺物	(佐竹)
1 堅穴住居跡	8
2 掘立柱建物跡	22
3 井戸跡	31
4 土坑	39
5 溝状遺構・柱穴	42
6 その他の出土遺物	45
V まとめ	(佐竹)
1 調査のまとめ	49
2 遺構の変遷と性格	49
3 本遺跡出土瓷器系陶器と太平洋地域出土瓷器系陶器の比較検討	50
報告書抄録	51

表

表 1 堅穴住居跡観察表(1)	20
表 2 堅穴住居跡観察表(2)	21
表 3 掘立柱建物跡観察表(1)	29
表 4 掘立柱建物跡観察表(2)	30
表 5 S E101井戸部材観察表	38
表 6 井戸跡観察表	45
表 7 出土遺物観察表(1)	47
表 8 出土遺物観察表(2)	48

挿 図

第1図	遺跡位置図	3	第14図	S T 9・10堅穴住居跡	18
第2図	遺跡概要図	4	第15図	S T 9・10堅穴住居跡出土遺物	19
第3図	地籍図	5	第16図	S B21掘立柱建物跡	23
第4図	基本層序	6	第17図	S B22・23掘立柱建物跡	25
第5図	S T 1 堅穴住居跡	9	第18図	S B24・25掘立柱建物跡	26
第6図	S T 1 堅穴住居跡出土遺物(1)	10	第19図	S B26・28掘立柱建物跡	27
第7図	S T 1 堅穴住居跡出土遺物(2)	11	第20図	S B29掘立柱建物跡	28
第8図	S T 2 堅穴住居跡	12	第21図	S E105・116井戸跡	32
第9図	S T 2 堅穴住居跡及びS D123 溝状遺構出土遺物	13	第22図	S E105出土瓷器系陶器甕	33
第10図	S T 4・5・6・8 堅穴住居跡	14	第23図	S E101井戸跡	35
第11図	S T 4・5・6・8 堅穴住居跡 出土遺物(1)	15	第24図	S E101井戸跡出土井戸部材(1)	36
第12図	S T 4・5・6・8 堅穴住居跡 出土遺物(2)	16	第25図	S E101井戸跡出土井戸部材(2)	37
第13図	S T 4・5・6・8 堅穴住居跡 出土遺物(3)	17	第26図	土坑	40
			第27図	土坑内出土遺物	41
			第28図	溝状遺構(1)	43
			第29図	溝状遺構(2)	44
			第30図	その他の出土遺物	46

図 版

卷頭図版	S E105出土瓷器系陶器甕
図版1	調査区全景・調査風景
図版2	調査風景・基本層序
図版3	堅穴住居検出状況・遺物出土状況
図版4	堅穴住居検出状況・遺物出土状況
図版5	堅穴住居検出状況・遺物出土状況
図版6	掘立柱建物跡検出状況
図版7	遺構検出状況
図版8	井戸跡検出状況
図版9	S E101検出及び完掘状況
図版10	溝状遺構検出状況

図版11	土坑検出及び遺物出土状況
図版12	出土土器
図版13	出土遺物
図版14	出土土器甕
図版15	出土土器甕・甕
図版16	出土土器甕
図版17	出土土器甕
図版18	出土遺物
図版19	SE101出土井戸部材
図版20	SE101出土井戸部材

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

昭和新田遺跡は、山形県のほぼ中央にあたる朝日町北部の大谷地区に位置し、北は大江町と接し、東に最上川を抱き、この母なる川によって形成された河岸段丘上に営まれた。

今回の発掘調査は、山形県農林部による平成9年度扱い手育成基盤整備事業(大谷地区)に伴って実施されたものである。本遺跡は、同事業に関わる平成8年度遺跡詳細分布調査によって遺跡の存在が確認され、平成8年10月～11月に山形県教育庁文化財課による事業区域内の試掘調査が行われた。調査は4月に遺跡詳細分布調査を行い、その結果に基づき10月に1m×1mの試掘坑を75箇所設定して坪掘りを行い、11月には重機を用いて17本のトレンチ調査を実施した。

その結果、17本の内15本のトレンチから遺構・遺物が検出され、遺跡は最大長で東西140m・南北100mの、削平を受ける微高地部分が範囲となることが明らかになった。遺物として縄文土器片・石器剝片・平安時代の須恵器片・土師器片などが出土し、また柱穴・溝跡などの遺構が検出されたことにより、縄文時代・平安時代～中世にかけての集落跡であることが確認され、平成8年度新規発見遺跡として登録された。

県教育庁文化財課では事業主体である山形平野土地改良事務所との間で、遺跡の現状保存の可能性や工事施工方法の検討なども含めて調整協議を行った。その結果、遺跡範囲である7,800m²全体について、工事に先立って、図面・写真などによる記録保存を目的とした緊急発掘調査で対応することになり、平成9年度に財団法人山形県埋蔵文化財センターが県の委託を受けて、発掘調査を実施することになったものである。

2 調査の経過

調査区は現況の田圃畦畔を基準に10m×10mのグリッドで方眼地区割りした。調査区が逆L字形を呈しているため遺跡の中心をD-6グリッド杭に置き、そこから南への張り出しを1区、東への張り出しを3区、両区に挟まれた部分を2区と便宜上区分し、全区の遺構検出終了後2区より精査を開始した。面整理終了後から連日の長雨にたたられ、調査は排水を施しながら雨中の作業を進める日が続き、作業効率が上がらず苦労を強いられたことを付け加えておきたい。

調査の行程は以下の通りである。

- 5月7日 鋼入れ式。器材搬入。調査開始。
- 5月8日 面整理及び遺構検出作業を行う。
- 5月12日 グリッド設定。調査区をD-6グリッドを基準に1～3区に区分け。
- 6月17日 遺構検出完了精査開始。遺構密度の高い2区・3区・1区の順で行う。
- 7月6日 調査説明会開催。雨天により秋葉山交遊館に会場を変更して開催。参会者85名。
- 7月15日 空中写真測量実施。
- 7月18日 調査終了。器材搬出。

II 立地と環境

1 地理的環境

昭和新田遺跡は、山形県西村山郡朝日町大字馬神に所在する。馬神は大谷地区の集落に入る手前に位置し、現況は国道287号に近い。当地区は最上川左岸の河岸段丘にあり、標高は約145mを測る。遺跡の南側には秋葉山（標高224.6m）橋跡が隣接し、北側には日光山（標高300m）、西には大谷集落、東には岩坂集落が遺跡の周囲を取り囲んでいる。

本遺跡が存在する大谷地区は、最上川の中でも、荒砥～左沢間の25kmにわたる五百川渓谷と呼ばれる部分で形成された下位段丘面に集落が営まれている。その形成期は約3万年前とされ、幅の広い平坦地が多いことを特徴とする。段丘面形成期の最上川は現在以上に曲流しており、その痕跡を大谷地区北側丘陵地帯に色濃く残している。遺跡南側に隣接する秋葉山はこの曲流の内側に形成された丘であり、曲流によって最上川の侵食作用を大きく受けることがなかったため形成されたといわれている。

2 歴史的環境

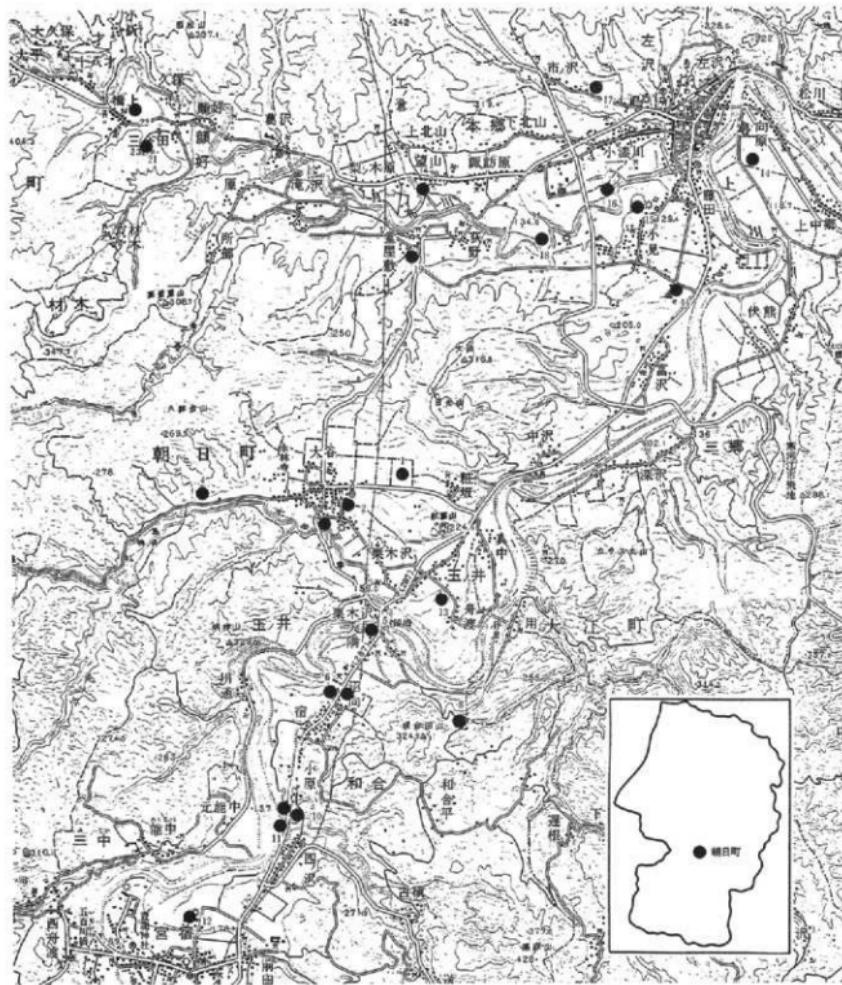
朝日町には、最上川をはじめ朝日川・大谷川等の河岸段丘面に多くの遺跡が存在している。古くは、後期旧石器時代の遺跡として学史的にも先駆をつけた大隅遺跡をはじめ、縄文早～前期の釜山遺跡、中期の上ノ原・上ノ台・川前・八ツ自久保遺跡、後期の沼向遺跡、晩期のウシガシ・岩坂遺跡等が存在する。また、平成8年度に新規登録された小塙遺跡からは縄文土器の他に弥生土器の出土もみられたことから、弥生時代も人々の生活の営みがあったことが裏付けられた。古墳時代・古代の遺跡は上ノ台遺跡から須恵器の出土があったと伝えられる以外は遺跡の存在は確認されなかった。

朝日町でも特にこの大谷地区は古くから歴史に登場する地域であり、殊に遺跡より西に12km離れた名勝大沼の浮島を中心に、古代から寺社に記録や伝承が残されている。大沼大行院所蔵『大行院系図』の中で、その開基は白鳳9(670)年役証覚とする記録が残されている。また同僧は天武9(680)年大沼浮島稻荷神社を草創したとも伝えられている。

承和7(840)年には、大谷南蔵院が白山神を加賀国より分靈し祀ったといわれている。白山神社はその後、江戸時代には約20石の朱印地を持ち、大谷村を始め大暮山・川通・栗木沢・舟渡・真中・化粧坂・中沢・富沢9ヶ村の總鎮守府であった。

中世の時期は、大沼を含む当地が文治5(1189)年、鎌倉幕府の政所別当・大江広元が地頭となつた寒河江荘域に含まれ、その支配下に置かれた。大江氏は当初鎌倉に居住し、寒河江には代官を派遣していたが、13世紀末・大江元順の時代になって寒河江に土着し、その後16世紀末の最上氏による支配まで、約400年間にわたり領主として当地に君臨し続けた。

徳川幕府成立後の朝日町は、寛永元(1624)年頃より幕末まで45ヶ村に分かれていたが、天領の大谷村・大暮山村と浮島稻荷明神社領朱印地の大沼村の計3ヶ村を除く42ヶ村は庄内・松山藩左沢領であった。

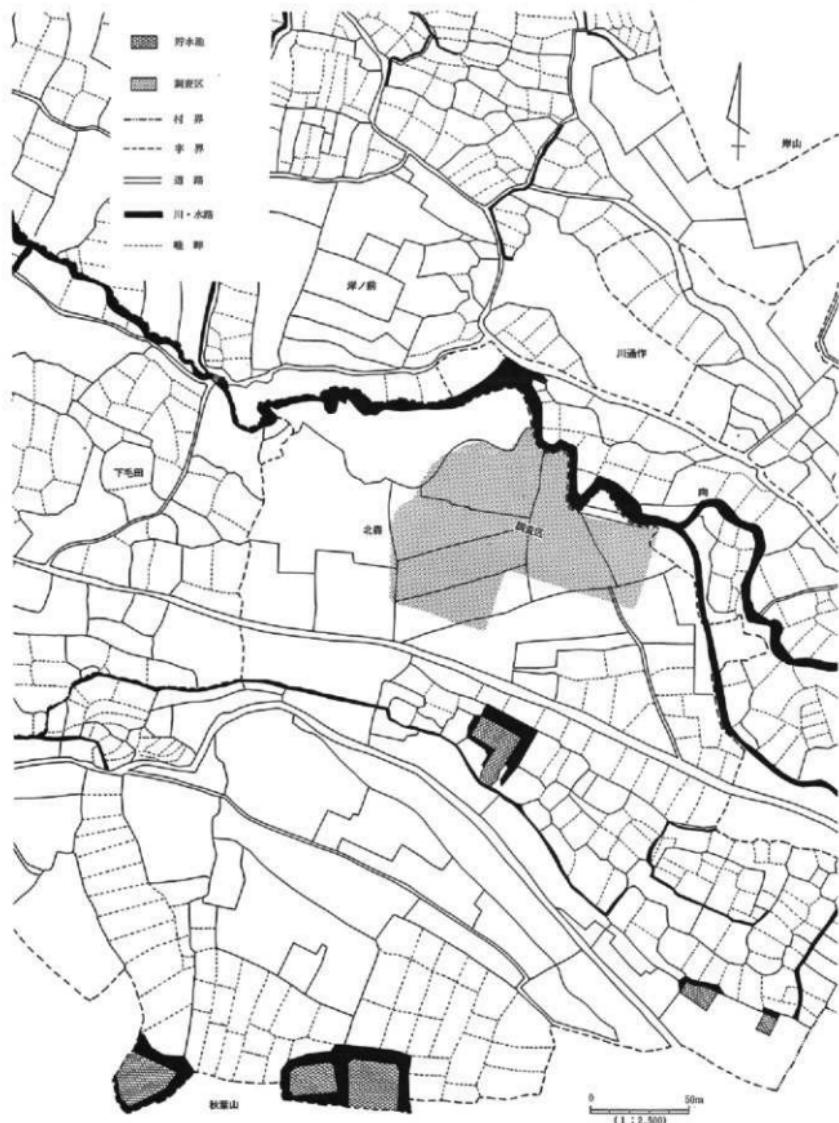


- | | | | |
|---------------|-------------|---------------|---------------|
| 1 朝和新田(平安・中世) | 2 上ノ原(平安中期) | 3 蓬萊(平安) | 4 石狩(繩文) |
| 5 大野(古石器) | 6 川前(平安中期) | 7 皆古(平安中期) | 8 喜山(平安・古墳) |
| 9 小見(平安・奈良) | 10 駒取(平安中期) | 11 八ツ久保(平安中期) | 12 上ノ台(平安中期) |
| 12 ウシガシ(平安中期) | 14 向原(平安) | 15 小見(平安中期) | 16 下原(平安) |
| 17 岸申山(古石器) | 18 下原B(平安) | 19 豊屋敷跡(中世) | 20 蓬山(古石器・平安) |
| 21 三合田(平安) | 22 館上(平安中期) | 23 斎田宿跡(平安) | |

第1図 遺跡位置図 ($S = 1 : 50,000$)



第2図 遺跡概要図 (S = 1 : 2,500)



第3図 地籍図 (明治21年 S = 1:2,500)

III 遺跡の概観

1 基本層序

昭和新田遺跡の位置する段丘面は、第三紀中新世の堆積岩あるいは鮮新世の堆積岩（未固結の砂・疊）の土壌からなる。

調査区を作業行程上、便宜的に3つの区に分けたことから、各調査区壁面の任意の位置を抽出し記録をとった。各区毎に若干の差異が認められ、これらから遺跡の覆土の堆積状況が概観できた。

基本層序は以下の通りである。

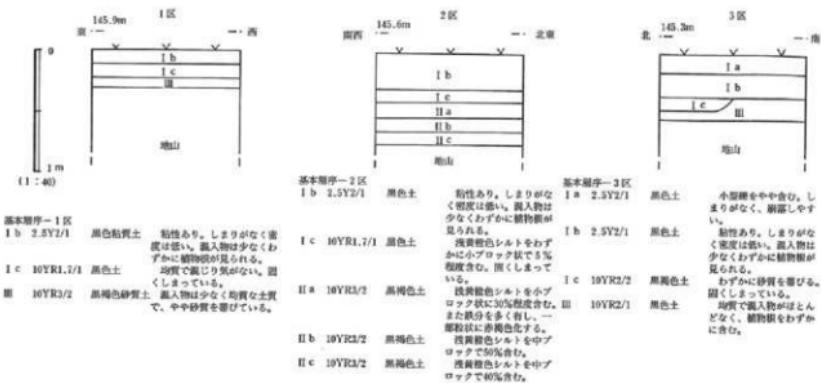
覆土の層位は概して3種に大別できる。I層は表土であり現在の水田の耕作面を形成している。II層は整地層である。土中に混入される浅黄橙色シルトの混入割合の差異からa～cに細分したが、3種とも整地による堆積であり開田時の痕跡と思われる。III層は旧地表を含む黒褐色土層であるが、旧表土の把握が困難であったため、地山まで掘り下げて遺構検出を行った。以上の基本層序の概観を受けて、以下に各区毎の土層の特徴を述べる。

1区は遺跡の中では地山がやや高くなってしまっており、覆土の堆積が最も薄い。III層はわずかに確認できるが、遺物等は覆土中からは確認できなかった。

2区は北端で1区より地山面が約30cm低く、II層が約50cmにわたり堆積しており、III層は見られない。

3区は北半部で比較的安定したIII層の遺構覆土を残していた。II層は北半部では確認できるが南半部ではみられない。更に南半部は地山面まで大きく削平を受けしておりIII層は確認できず、II層直下が地山となる。

遺跡は南から北に向かって緩やかに傾斜して下がる地形を有していたと推定できるが、開田時の削平によって、南半部は地山面まで削平を受け、北半部も縁辺部を中心に遺構面を大きく削平されたといえる。また検出面の地山黄褐色シルト層は黒色土粒子をやや含み、遺構との差異を明瞭にできない箇所が多くあり、遺構検出は困難であった。



2 遺構と遺物の分布

遺構の分布に触れる前に、調査区の現況について触れてみたい。

調査区の現況は水田でありほぼ平坦な面を有しているが、以前は緩やかな斜面を有する傾斜地であったと思われる。また沢に接する北側縁辺部分(I-7グリッド～K-10グリッド付近)は一段下がった水田面を形成している。

遺跡は明治23年の地籍図(第3図)では畠地として利用されており、地元の伝承からは、桑畠であったと伝えられている。その後、昭和20年代に上流の馬神ダムが供用されるに至って、水田開発が成され、昭和50年代には小規模な基盤整備があり縁辺部分が土地改良されている。遺構配置図(付図)では搅乱と表記している。

遺構の分布 遺構はほぼ調査区の全域で確認できる。最も遺構の集中がみられるのは調査区北側縁辺の部分で、沢に接する自然堤防上である。この近辺では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡・井戸跡等の遺構が数多く検出された。それに比して調査区南側は、打込み杭の跡と考えられる無数の小柱穴が確認できる反面、その他の遺構の密度は非常に薄くなる傾向を示した。また、調査区東側の3区では、溝跡や柱穴は多数確認できたが、明確な建物跡になる遺構は検出することができなかった。

登録遺構総数は柱穴及び小柱穴を含め、約1,500基に至った。その内の約3分の2については掘り方を伴わない小柱穴がその割合を占めている。ほとんどの小柱穴から遺物は出土しなかつた。中には底面に根固めのためと思われる河原石を据えた柱穴が6基検出された(付図に★SP番号で図示)、確実に建物跡になるものはなかった。

調査区の南西端から北東にかけて、調査区を横断する形で全域にわたって赤褐色シルト質疊を多く含む土色が検出されたが、トレンチによる断ち割り調査によって地山であることが確認できた。赤褐色シルト質疊層は黄褐色シルト層を南北に分断する状態で下に潜り込み、調査区北側縁辺で遺構検出面下約1mで検出される。そして隣接する沢にいたることが確認できたことから、この疊層は段丘形成期の河床であった可能性が高い。同疊層からはS E101直下で自然木の出土があったが、遺物の出土はみられなかつたため無遺物層であると判断し中央トレンチ以外では掘り下げによる確認は行わなかった。

遺物の分布 遺物はコンテナにして21箱の出土を見た。調査面積に比して量としては決して多くはない。また中世の時期を捉える遺物が少ないことも特徴の一つである。傾向としては遺構の集中域(2区～3区の北側縁辺部)を中心に平安時代(9世紀中頃)の遺物が出土し、比例して数が多くなる傾向がある。出土土器は破片点数にして総数1,521点(土師器1,331点、須恵器190点)を数えるが復元できるものは少なく、破片を含めて実測によって個体の存在が確認できたのは87点である。

また、表土除去及び面整理段階で351点のフレークが黒褐色土層から出土しているが全て表土中のものであり、縄文時代に遡ると思われる遺構は検出できなかつた。したがって、調査区は縄文時代の遺構域からは外れているものかと思われる。

IV 検出遺構と出土遺物

1 穫穴住居跡

竪穴住居跡は全部で8棟検出されている。検出住居は全て平安時代のものと思われる。遺存状態は悪く、全ての住居跡は大きく削平を受け床面での検出がそのほとんどを占める。配置をみると、2区の調査区縁辺に集中する傾向がある。特徴的なのは2~4棟の住居が切り合う状態が存在する点である。切り合う住居は全て主軸をずらしながら、建て替えを行なっており、複数の時期にまたがって存在していたものと思われる。

煙道とカマドを有する住居跡は、確実なものとして3棟確認できる。それらは全て南向きもしくは東向きに煙道が張り出している。以下に各住居跡の検出状況及び遺存状況を述べるが、詳細については観察表を参照していただきたい。

S T 1 (第5図) 2区南側で検出された。北半部は基盤整備時の農道設営時に地山まで大きく削平を受け、全く遺存していなかった。南側にカマド跡及び煙道を有していた。

S T 2 (第8図) 既に壁は削平され、床面もほとんど残っていない状態で検出された。

焼土の検出により建物跡であることが確認され、当初は2つの住居の切り合いであると思われたが精査段階で1棟であることが確認できた。西側は農道設置時に削平を受けており、遺存していない。

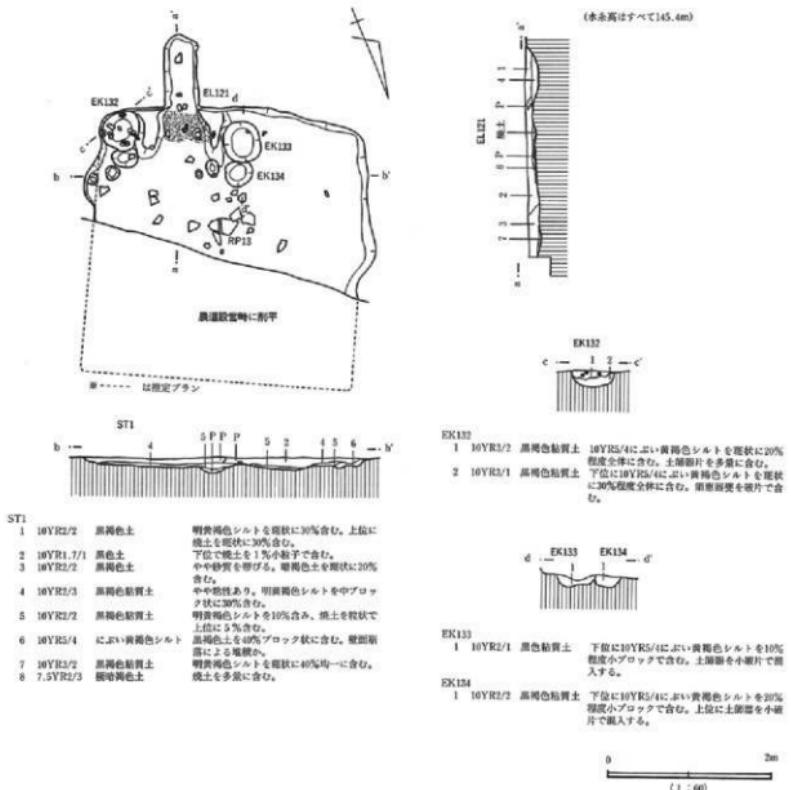
S T 4・5・6・8 (第10図) 検出時は5棟による切り合いと考えられたが、調査の結果4棟であることがわかった。重複関係は新しいものからS T 4→S T 5→S T 6→S T 8となる。床面は4つとも同じ位のレベルで上部は大きく削平されており、壁の立ち上がりはS T 4北側の東西隅、S T 5の西側、S T 8の東側でようやく確認できた状態である。S T 4・S T 5・S T 6は床下に小規模の土坑を備えており、完形遺物が出土している。カマド跡を確認できる住居はS T 4およびS T 6である。共に住居の南端に焼土を検出し、カマドの本体と思われる粘土塊を検出している。

S T 9・S T 10 (第14図) 2区北端で検出された2棟である。重複関係は、新しいものからS T 9→S T 10となる。S T 9は最もプランが小さく2.5m弱である。南側でわずかに焼土を断面で確認できたが、明確なカマド跡は検出できず、長期にわたって生活の拠点をおいた痕跡が見当たらない状況であった。

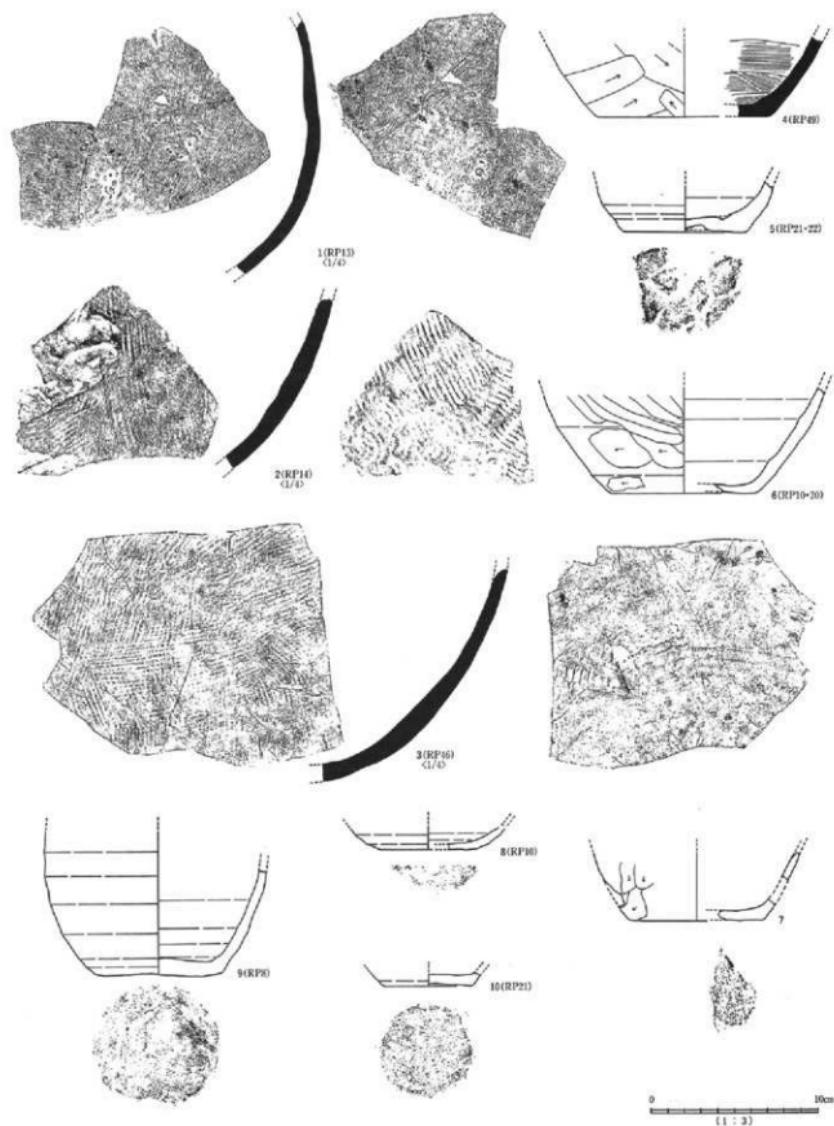
S T 10は一辺3.5mの方形プランであったと思われるが、南辺はS D117によって、北辺は基盤整備による削平を受け確認不能状態であった。西壁でかろうじて立ち上がりを確認できたことから方形プランを有することがわかった。東壁にはカマド跡が検出されている。S T 1と同様、煙道がやや長く先端がピット状に落ち込んでおり、袖付近から粘土塊が多量に出ている。

床面は南東部を部分的に粘土質シルトによって整地を行なっている。精査過程で、E L214のカマド跡を1基検出した。形状はE L120と同程度の規模を有することから、S T 10の一部といえる。貼床をはがす過程で検出された状況と、E L120に大量の遺物があるのに対しE L214には全く遺物が見られないことから、付け替えが行われたと考えられる。

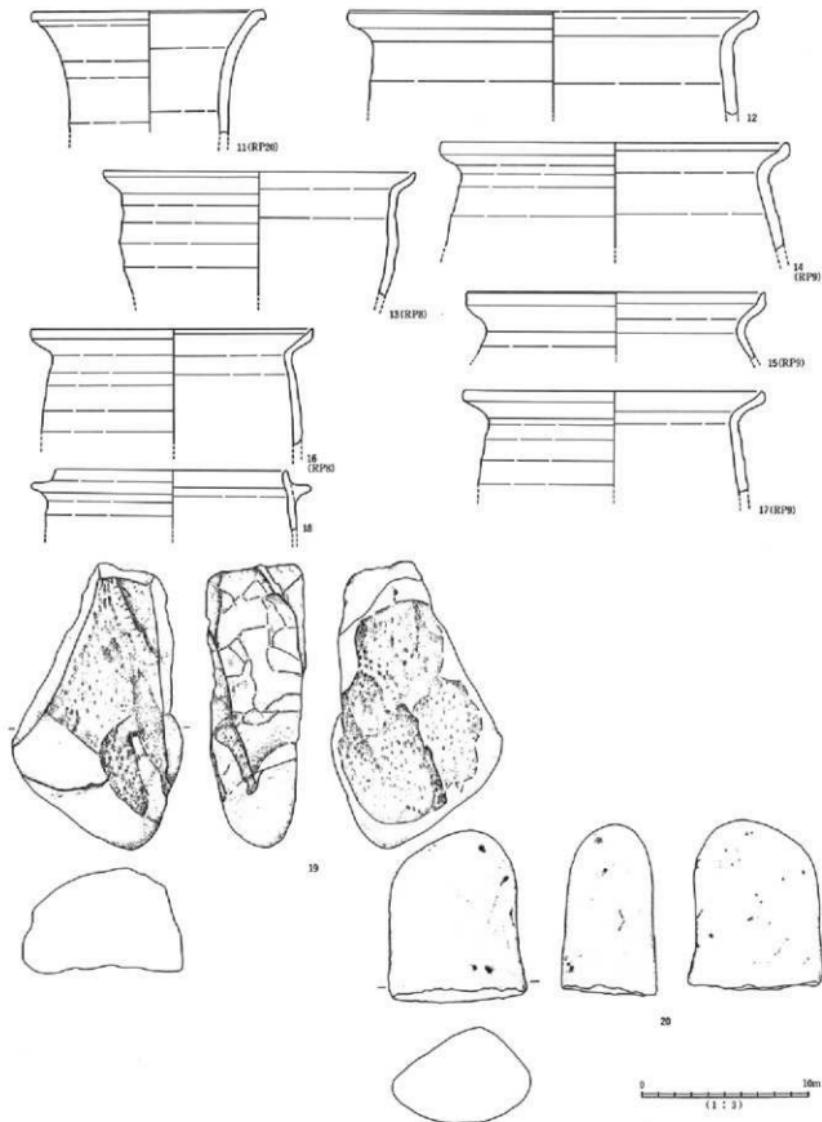
S T 1 出土遺物（第 6・7 図） 1～3 は須恵器壺の大型品で、それぞれに外面にタタキ、内面にアテが見られる。1 は体部下半が凹状に窪んでおり、焼成時に他の個体との接触で生じたものと思われる。4 は平底の壺底部で切り離しは不明である。体部下半外面はケズリ、内面はハケメ調整が施されている。胎土は粗い。8 はロクロ使用の酸化焰焼成の壺であるが底部の切り離しは磨滅が進み不明である。11 は壺、18 はロクロ成形の羽釜であり、固く焼きしまっている。その他は土師器壺で、ロクロ成形のものは 5・9・10 である。6 はロクロ成形の後ケズリもしくはミガキを加えた可能性があるが磨滅のため不明な点が多い。19・20 はカマド袖石で面取り加工を施している。



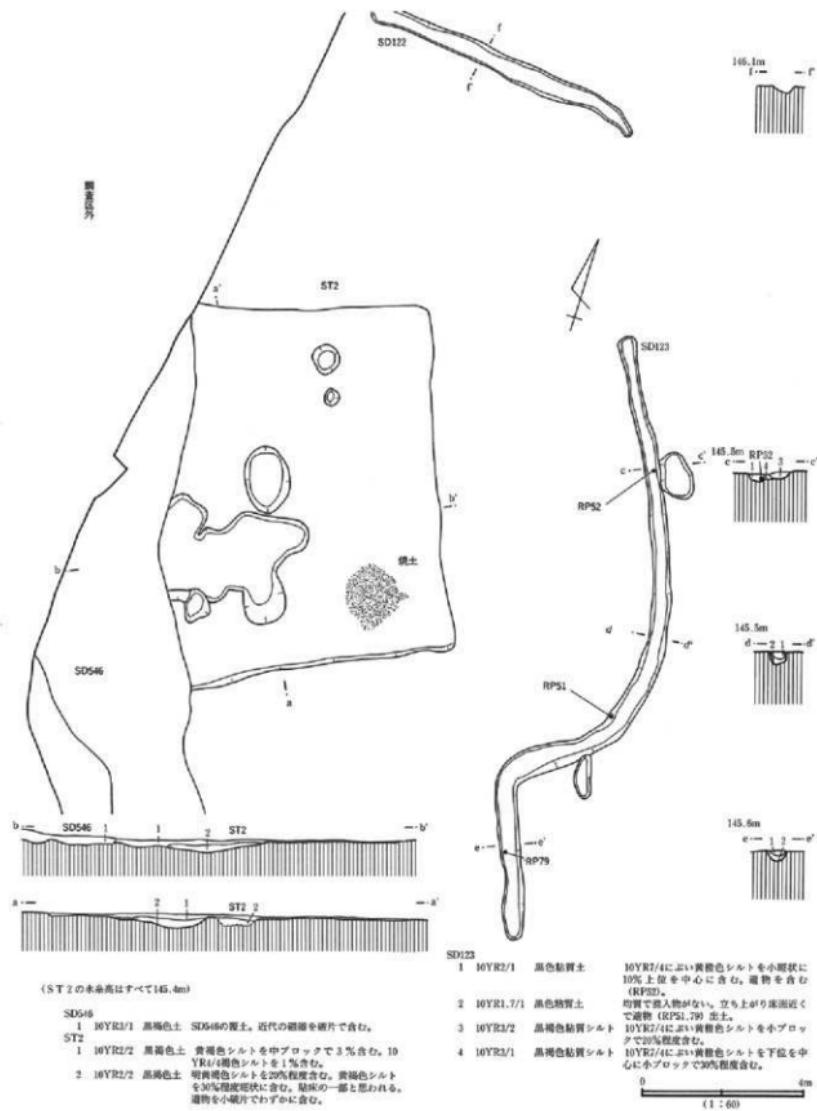
第 5 図 S T 1 壁穴住居跡



第6図 ST 1 壁穴住居跡出土遺物(1)



第7図 ST 1 積穴住居跡出土遺物(2)



第8図 S T 2 積穴住居跡

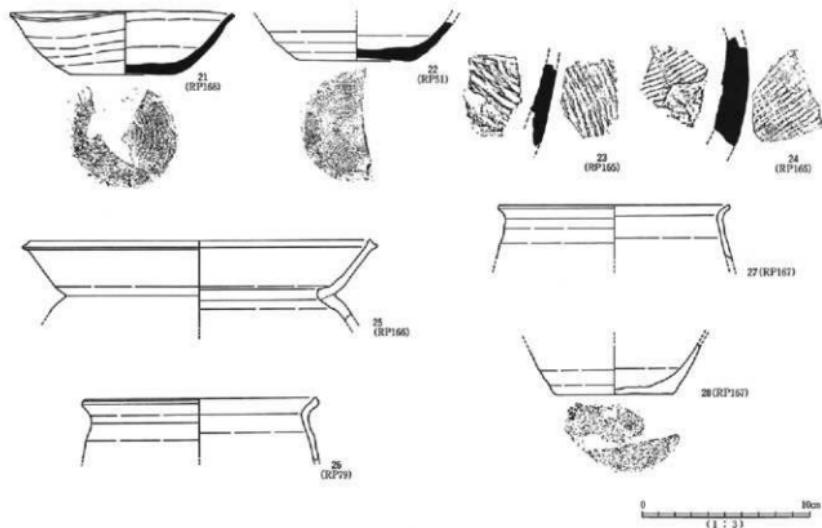
S T 2 及び S D123 出土遺物 (第 9 図) 破片資料がほとんどで確実に時期決定できる遺物はないが、概ね 9 世紀後半と考えられる。

21 は須恵器環で、回転糸切りされヨコナデ調整が施される。22 は S D123 出土の須恵器環で回転糸切りでヨコナデ調整がある。23・24 は須恵器甕であるが破片である。同一個体の可能性もある。25 はロクロ成形の土師器甕口縁部で焼成は固い。口唇部が横につまみ出される形状を示す。本遺跡では異形の口縁形態である。26 は S D123 からの出土でロクロ成形甕口縁部である。磨滅が進み遺存状態は悪く調整は不明。27 はロクロ成形土師器甕でプロポーションは 26 と酷似する。磨滅が激しく調整等は不明。28 は 27 と胎土・焼成が酷似し同一個体の可能性あり。底部切り離しは磨滅が進み不明である。

S D123 の出土遺物は 22 と 26 を図化し掲載したが S T 2 出土遺物と大差ない傾向を示す。したがって S D123 は S T 2 と同時期に存在していた可能性が高い。しかしながら、他の住居には溝を周囲に巡らす状況がみられないことから、今後検討を要すといえる。

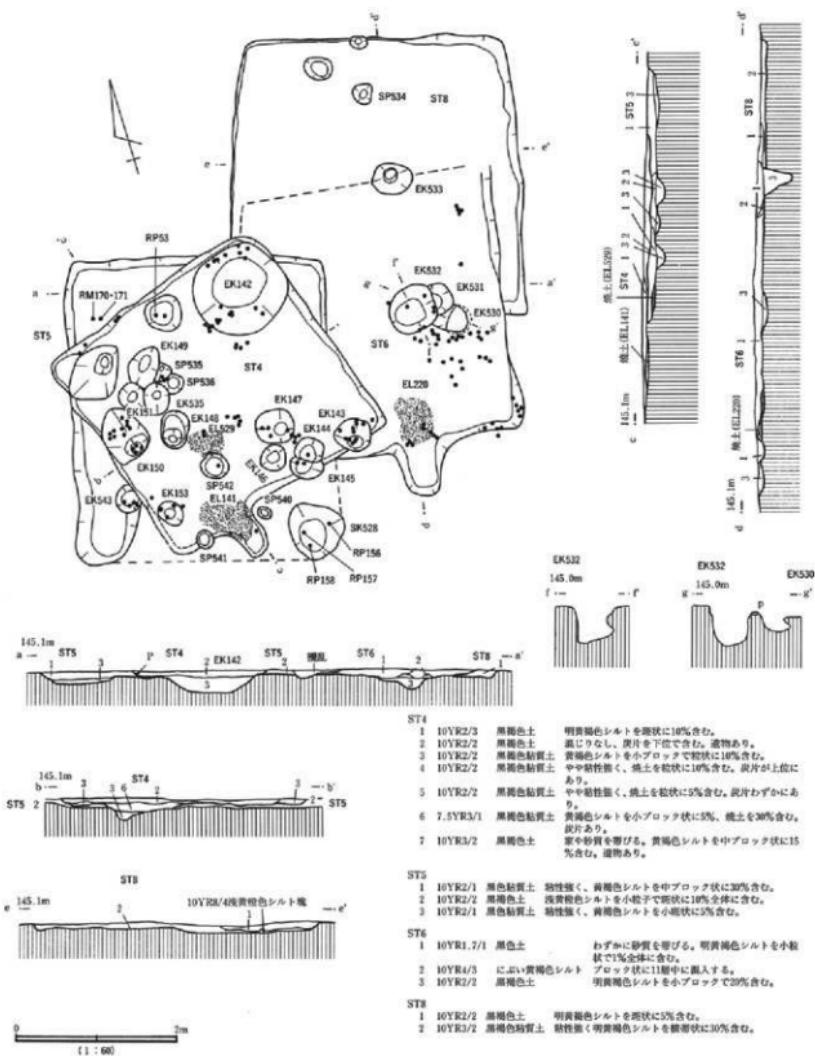
S T 4・5・6・8 及び S K528 出土遺物 (第 11・12・13 図) 出土遺物は 33 点を図示した。S T 4 を中心に破片で散在する状況がほとんどであった。散布状況は S T 8 から S T 4 へ時期が新しくなるにしたがって密度が濃くなる傾向を示す。完形になるものはほとんどない。尚 S K 528 については、その配置関係から S T 4・S T 5 との関連も考えられることからここで一緒に扱いたい。

S T 4 からは 20 点図化した。环は 30 が須恵器の回転糸切りでナデ調整がある。33 は土師質の胎

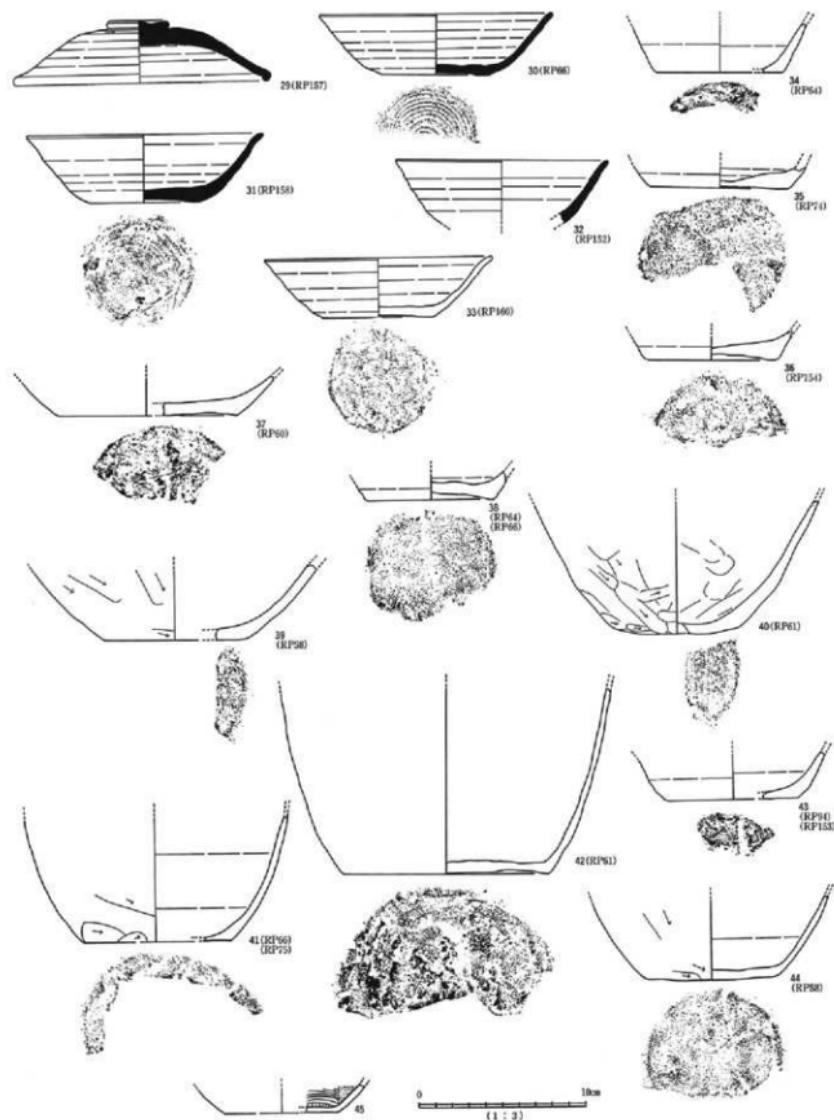


第 9 図 S T 2 壁穴住居跡及び SD123 溝状遺構出土遺物

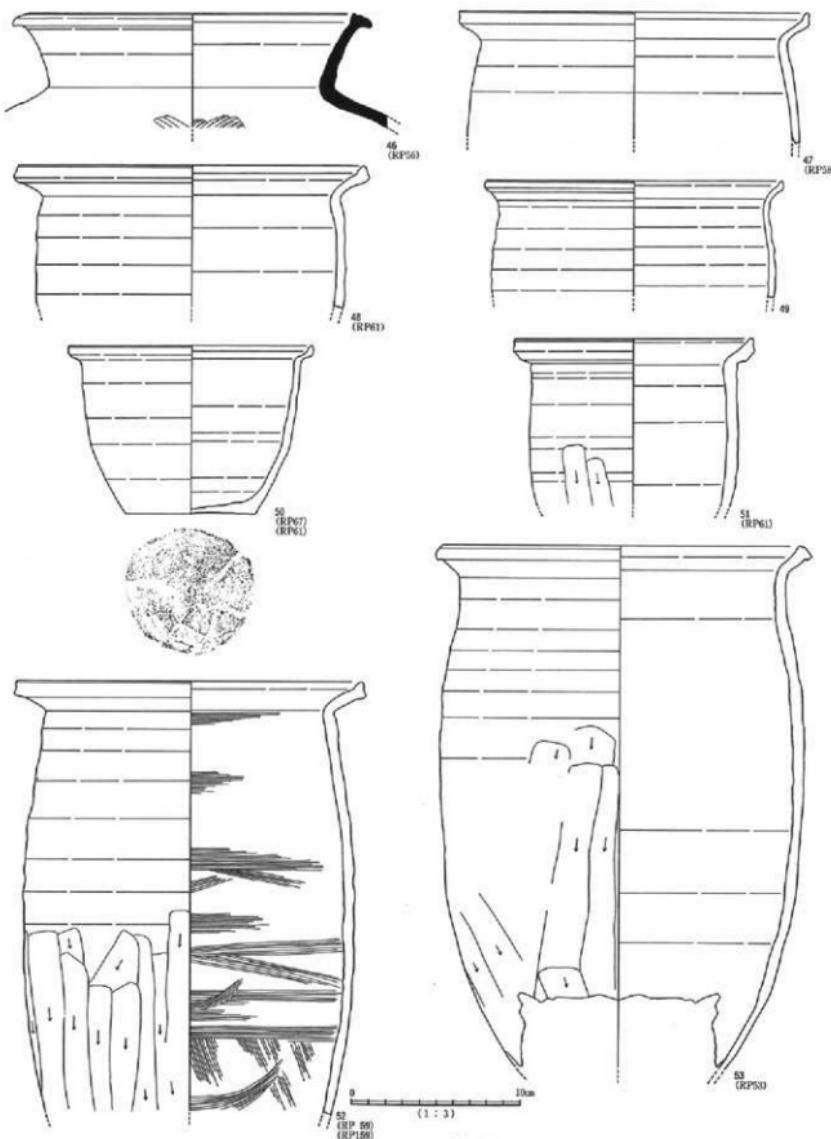
——— 檢出部分推定



第10図 ST 4・5・6・8 壁穴住居跡



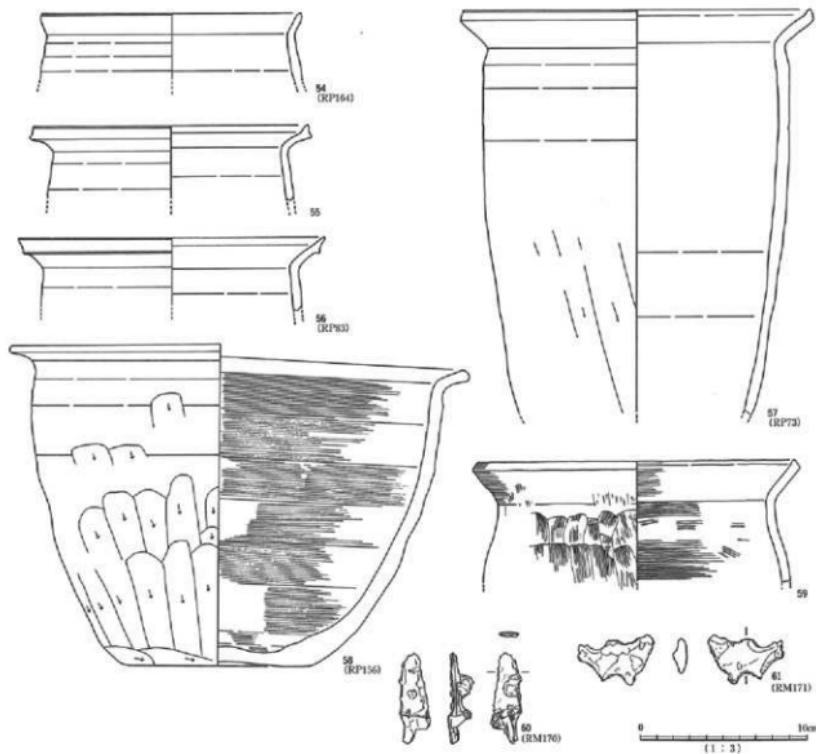
第11図 S T 4・5・6・8 竪穴住居跡出土遺物(1)



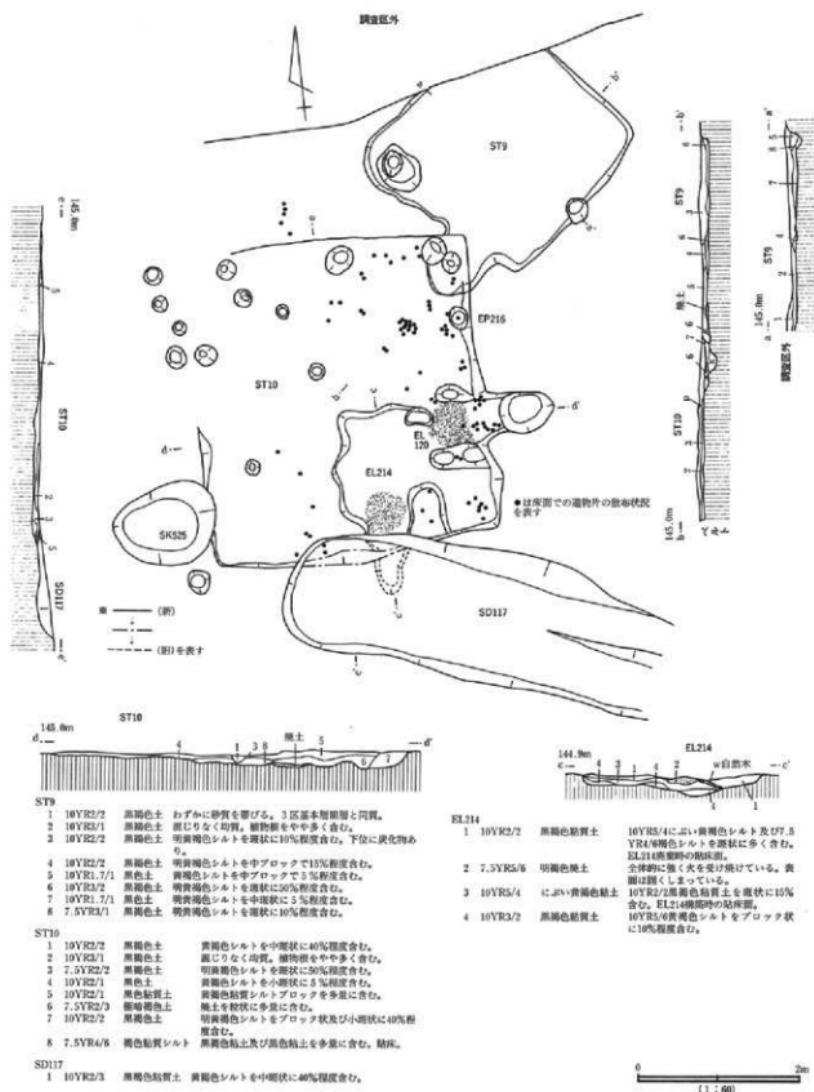
第12図 S T 4・5・6・8 竪穴住居跡出土遺物(2)

土で回転糸切りでナデ調整がある。34・40・46・53は壺で、土師器のロクロ成形のものが12点で、ケズリ主体と成形不明のものが37・39～41・44の5点で、圧倒的にロクロ成形品が多い。41・42・44は器厚が3～4mmと薄く、磨滅が激しく調整は不明である。S T 5からは6点の図化である。45は内面に黒色処理を施した土師器壺で、土師器壺は54・57がロクロ成形、59の成形は不明である。60は鉄製刀子で、柄部は欠損する。わずかに木片が付着する。61は鉄滓で他に2点同地点から出土している。S T 6は破片を除くと43・56のロクロ成形の土師器2点のみの出土である。S T 8では32の須恵器壺で、口唇部がわずかながら外反する。

S K528からは29・31・55・58が出土した。29は須恵器蓋で口唇部が内弯するのが特徴である。31の壺は回転糸切りナデ調整で口唇部がわずかながら外反する。S T 4及びS T 8出土品と酷似し9世紀後半のものと考えられる。55はロクロ成形の土師器壺で、口唇部が垂直に立ち上がる。58は壺で内面にハケメ調整を行なっている。



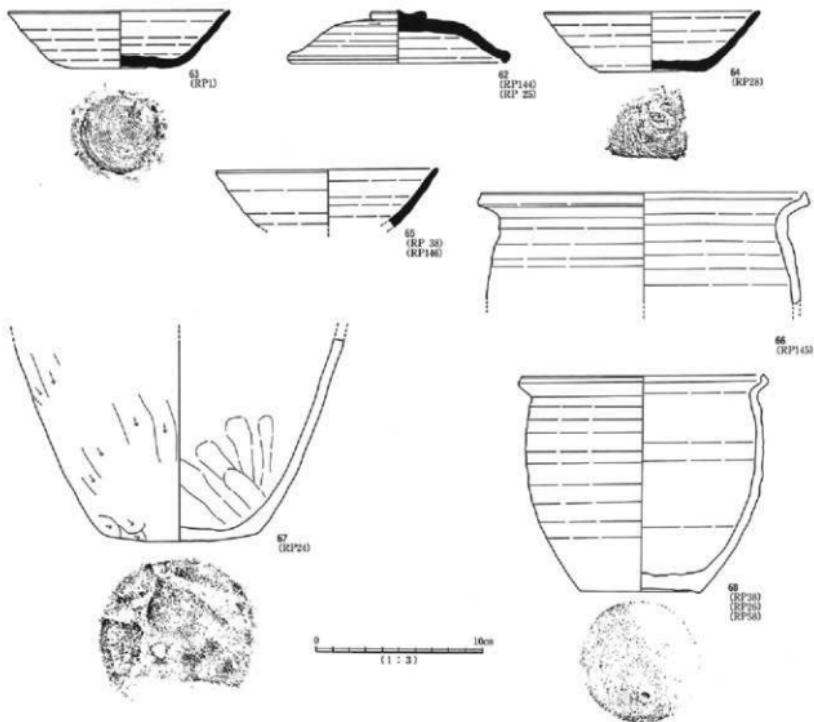
第13図 S T 4・5・6・8 竪穴住居跡出土遺物(3)



第14図 S T 9・10堅穴住居跡

S T 9・10出土遺物（第15図） S T 9においては63の須恵器坏1点である。覆土中からの出土でJ-3グリッドから出土の破片と接合したことから流れ込みの可能性がある。回転糸切りでナデ調整のもので時期は9世紀後半と思われる。

S T 10では6点図化した。62は須恵器蓋で、切り離し後ケズリ調整が行われている。つまみは頂部がわずかに突出する形態である。またこの62はS T 10床直上で出土したが同一個体の破片がE P216柱穴底面から1点出土し接合できた。柱穴が抜かれた後に底面に流れ込んでおり、住居が廃棄される時の遺物として推定できる。時期は9世紀後半と考えられる。64・65は須恵器坏で、64は回転糸切りでナデ調整を行なっている。体部はほぼ直線的に外傾する。65は63・64と体部・外傾度が酷似し口径も同法量を示す。66・67・68は土師器甕で、66はロクロ成形で、口唇部は垂直に立ち上がり端部が下がる口縁を有する。内面は磨滅が激しく調整は不明。67は内面に縦にヘラミガキが施される。外面及び底部は磨滅が激しく切り離し不明。68は小型の甕でロクロ成形で回転糸切りの底部が明瞭に識別できる。全体的に赤褐色化し、口縁部は内弯ぎみに立ち上がる。



第15図 S T 9・10竪穴住居跡出土遺物

表1 積穴住居跡観察表(1)

探査番号	遺構番号	平面形・規模・方向・覆土	床面・壁・壁溝・周溝	ピット・貯蔵穴・炉	出土遺物
第5図	S T 1	方形プラン。北側半分は農道設営時に削平され遺存しない。 規模は3.15m×3.15mだったと推定。 主軸は真北から東に19°振れる。 覆土は黒褐色土を基調としている。	床面は地山で直床と思われるが、明瞭ではない。確認面から約4~9cm程度掘り込んでいる。 壁はほぼ垂直に立ち上がり、4cmほど遺存する。 壁溝・周溝はない。	主柱穴は未検出。 南東隅に貯蔵穴(E K132)があり、遺物を多量に含む。 南壁にカマド跡(E L121)検出。煙道が南方へ走る	須恵器甕、土師器甕・羽釜、カマド石油等。
第8図	S T 2	方形プランで東側1m離れた間隔に溝を巡らす。 西側約3分の1は削平され依存しない。(S D546に切られる) 規模は2.75m×2.75mだったと推定。 主軸は真北から西に20°振れる 覆土はなく床面下層で検出。	床面は削平を受け遺存せず。貼床を伴っていたと思われるが、削平によって厚さ等は確認不能。 壁は南辺でのみわずかに3cm弱程掘り込み掘り方下層から立ち上がりを確認できる。 壁溝・周溝はない。	主柱穴は未検出。 南東隅に焼土検出。 カマドがあった可能性はあるがプランは検出できなかった。 中央に浅い落ち込み状の土坑あり遺物を破片で含む。	掘り方部分から須恵器壺・蓋破片(園化なし)出土。 S D123から須恵器壺片RP 51・52(園化なし)・79(園化なし)出土。
第10図	S T 4	方形プラン。S T 5・6と切り合う。S T 5・6より新しい。 規模は3m×2.9mである。 主軸は真北から西に17°振れる。 カマド部分が南向きに約55cm突出する。 突出部傍に土坑S K528あり。	床面は地山で直床と思われるが、明瞭ではない。確認面から約8cm前後掘り込む。土器が破片で大量に散布する。 壁はS T 5・6の覆土中から掘りこまれ確認が困難。北西隅では明瞭で、ほぼ垂直に7cm程度で立ち上がる。 壁溝・周溝はない。	主柱穴は未検出。 南壁にカマド跡(E L141)検出。 北東隅に貯蔵穴EKあり。 突出部分傍に土坑S K528あり。住居と関連の可能性あり。	ロクロ成形の土師器甕、須恵器甕等。 床面に破片で散布する状態で出土。
第8図	S T 5	長方形プランと思われるが正確な検出は不可能。S K528が南東隅にあたる可能性あり。 S T 4及び6・8と切り合う。 S T 4より古く6・8よりも新しい。 規模は3.65m×3.65mだったと推定。 主軸は真北から東に16°振れる。 覆土は黒褐色土を基調とする。	床面は地山で直床と思われるが、明瞭ではない。確認面から8cm程度掘り込む。土器が散布する。 壁は西壁及び北壁が明瞭で、やや外反しながら立ち上がる。深さは8cm程遺存。 壁溝・周溝はない。	主柱穴は未検出。 南壁にカマド跡(E L529)検出。 S K528あり。遺物を多量に含む。住居と関連の可能性が考えられるが、詳細は不明。	刀子1点・鉄滓4点出土。刀子は刃部のみで柄は遺存せず。 他に土師器甕を破片で含む。

表2 積穴住居跡観察表(2)

挿図 番号	遺構 番号	平面形・規模・方向・覆土	床面・壁・塗溝・周溝	ピット・貯藏穴・炉	出土遺物
第10 図	S T 6	方形プラン。S T 4及び6 8と切り合う。S T 4より古 く6・8よりは新しい。 規模は3.15m×3.15mだっ たと推定。 主軸は真北から東に7°振 れる。 覆土は黒褐色土を基調とする。	床面は地山で直床で あるが、明瞭に床面は 判断できない。確認面 から8cm程度掘り込み て、土器が破片で散布 する。 壁は東辺及び南辺で 8cmほど遺存し緩やか に立ち上がる。 塗溝・周溝はない。	主柱穴は未検出。 南壁にカマド跡 (E L220)検出。 S K528あり。住居 と関連の可能性が考 えられるが、詳細は 不明。	床面で土器 を破片で大量に 散布する。
第10 図	S T 8	方形プラン。S T 4及び6 8と切り合う。S T 4より古 く6・8よりは新しい。 規模は3.3m×3.1mである。 主軸は真北から東に14°振 れる。 覆土は黒褐色土を基調とする。	床面は地山で直床で あるが、明瞭に床面は 判断できない。確認面 から5cm掘り込む。遺 物の散布は極端に減少 する。壁の立ち上がり は垂直であるが、西辺 部は上部削平が著しく 立ち上がりを明瞭に確 認できない。 塗溝・周溝はない。	主柱穴は未検出。 カマド未検出。	遺物は破片で 須恵器1点、土 師器18点含むのみ。
第14 図	S T 9	方形プラン。S T 10と切り 合う。S T 10より古い。 規模は検出S Tの中では最 も小さく2.35m×2.3mであ る。 主軸は真北から東に42°振 れる。 覆土は黒褐色土を基調とする。	床面は地山の直床で 他の検出住居より平滑 である。確認面から約 12cm掘り込む。床下の 地山はやや砂質の強い 黄褐色シルトで均質で 安定している。 壁は垂直からやや外反 ぎみに立ち上がる。 塗溝・周溝はない。	主柱穴は未検出。 南辺部にわずかに 焼土を断面で確認で きたが、カマド跡は 未検出。 南西隅にピット状 の落ち込みを確認し たが遺物はなし。	覆土中から須 恵器破片で1 点のみ。
第14 図	S T 10	方形プラン。S T 9及びS D117と切り合う。S T 9より 新しくSD117より古い。 規模は3.6m×3.45mであ る。 主軸は真北から西に2°振 れる。 覆土は黒褐色土を基調とする。	床面は地山の直床で あるが、南東部を部分 的に、粘土質シルトに よって整地し床を貼る 形状を示す。 壁は確認面から5 ~10cm掘り込む。西辺 部及び北辺部は削平が 進み壁は検出不能。 塗溝・周溝はない。	主柱穴は未検出。 側柱穴と推測され る柱穴がE L120北 側から検出(E P 216)。 カマド跡を2基検 出。E L124→E L 120へ付け替えが行 われた可能性大。	須恵器蓋出土 (E P216底面出 土破片と床面出 土破片が接合)

2 堀立柱建物跡

堀立柱建物跡が全部で8棟検出された。うち、7棟は2区からの検出、1棟は3区S E101付近での検出である。SB28、SB29を除いた6棟については、掘り方が小さく不整円形を呈する・柱穴のアタリを明瞭に認識できる黒色土を有する等、いづれも同様の特徴を示していることから、中世の堀立柱建物跡ではないかと考えた。

しかしながら、柱穴の掘り方からは遺物が全く出土しなかったため、ここでは時期を決定できる資料は提示できない。

以下、検出状況を述べるが、計測値等の詳細は観察表を参照していただきたい。

SB21（第16図）

3面庇を持つ3間×3間の純柱の建物である。庇部分は柱穴はプランも小さく浅い。規模は8棟中最大である。

SB22（第17図）

2間×3間の純柱の建物である。規模はSB21に次ぐ大きさである。東側に4基の打ち込み小柱穴があり、建物と平行して走る。板塀等の施設が考えられる。

SB23（第17図）

2間×2間の建物である。中央に柱穴は見られない。

SB24（第18図）

2間×2間の建物である。中央に柱穴は見られないが、南側に打ち込みの小柱穴が逆L字状に並ぶ。2棟の重複かと思われたが、1棟のプランを形成しないことと主軸が同じことからSB24に付随するものと考えた。

SB25（第18図）

2間×3間の建物である。中央に柱穴は見られない。どの柱穴も比較的浅い。北東角の柱穴は未検出である。

SB26（第19図）

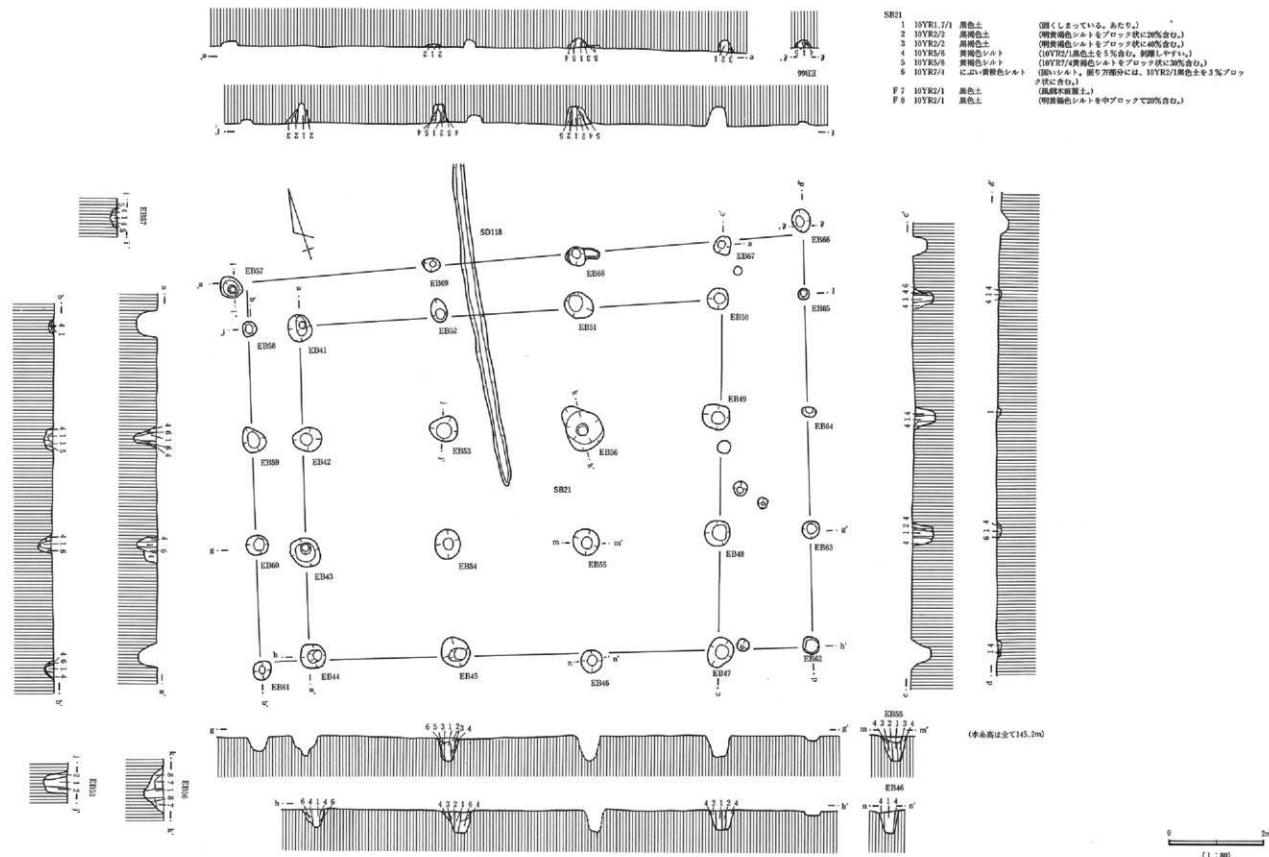
2間×2間の建物である。中央に柱穴は見られない。柱穴内側に小柱穴を配する規則性が看取される。2棟の重複かと思われたが、小柱穴でプランを形成するのに無理があることからSB26に付隨するものと考えた。

SB28（第19図）

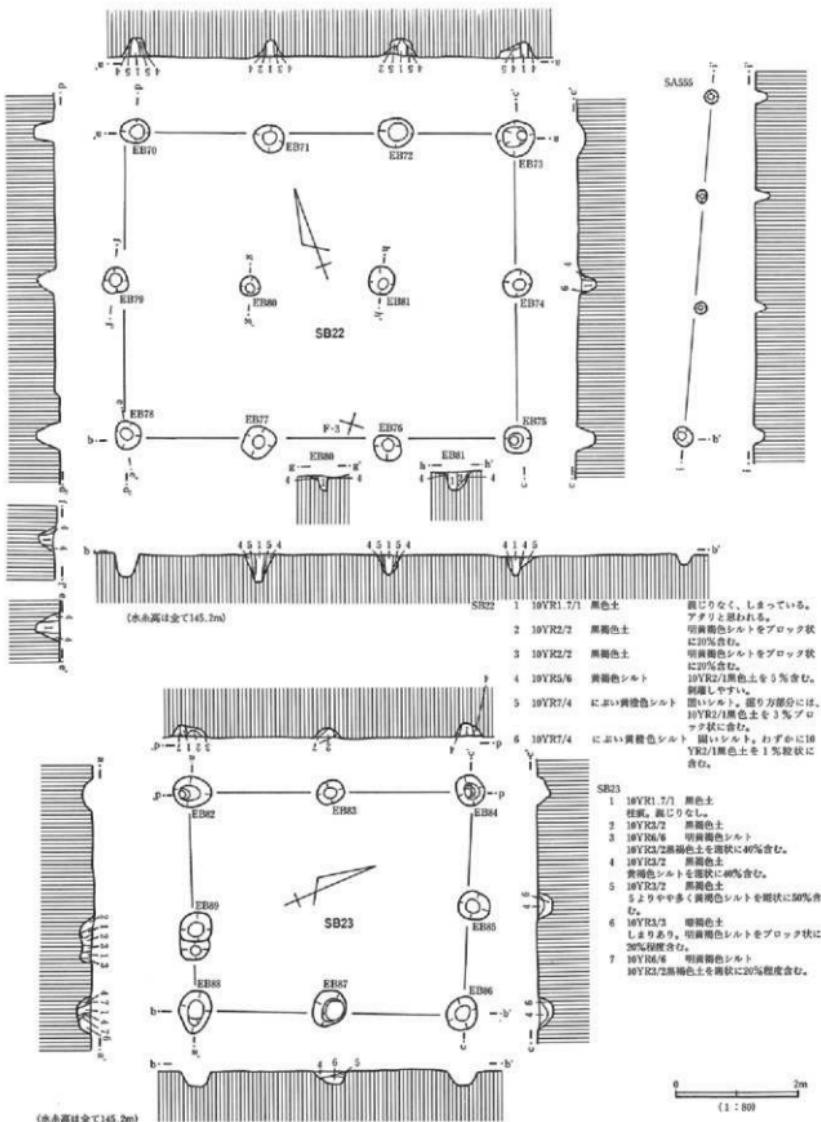
2間×2間の建物である。他の堀立柱建物跡群から距離的に間を置いていること・主軸方向が他とは異なること・掘り方が比較的大きくはっきりしていること・中央からは柱穴が検出されなかつたこと等から、前述の6棟とは時期を異にする可能性がある。

SB29（第20図）

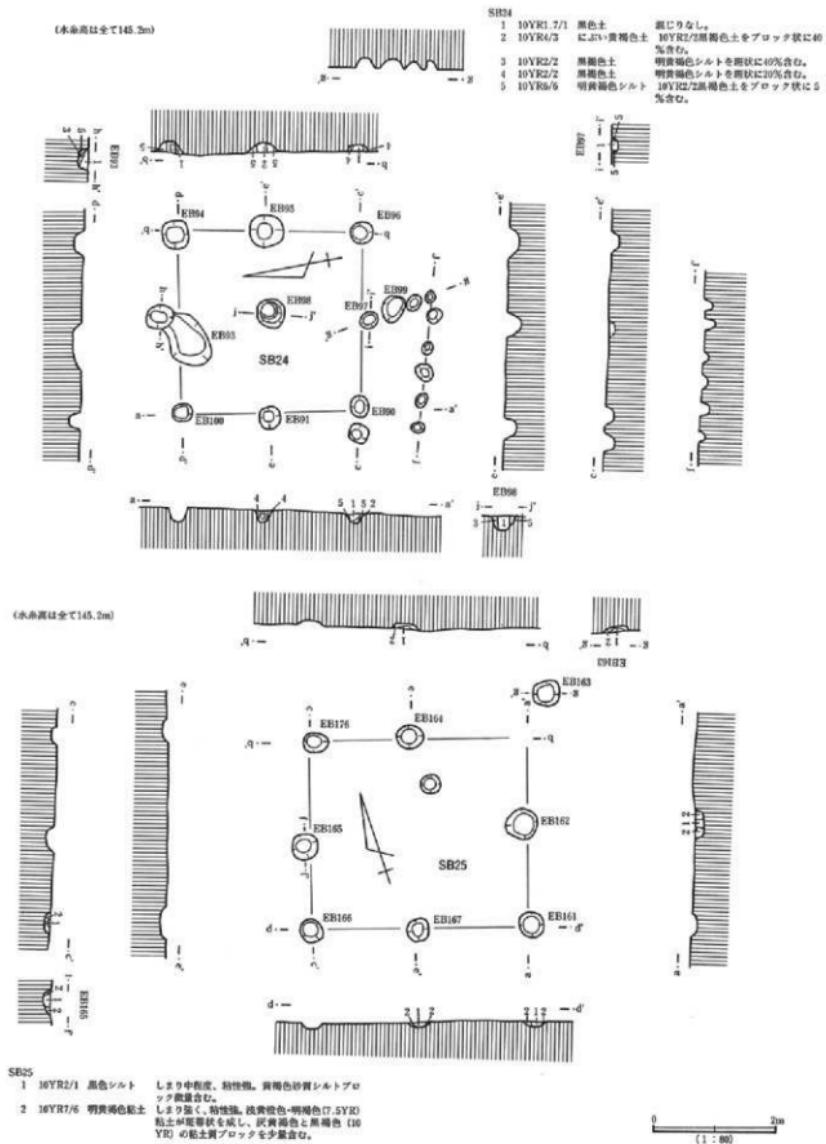
3間×2間の建物と思われるが、確証が得られるプランではない。SE101南側の柱穴群の中で検出されている。柱穴の中には根固めの礫を底に伴うものも含まれている。但し、周囲の柱穴にも、同様の形状を持つものが存在しており、一概にSB29に限った要因ではないともいえる。



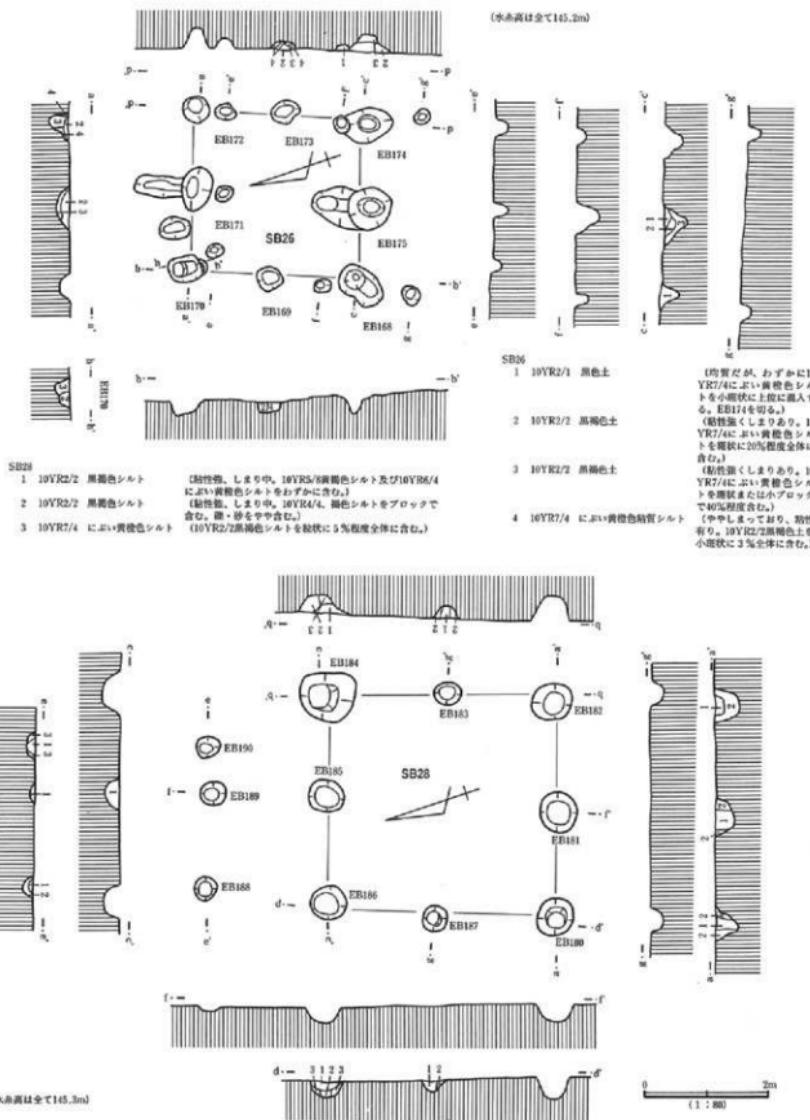
第16図 SB21掘立柱建物跡



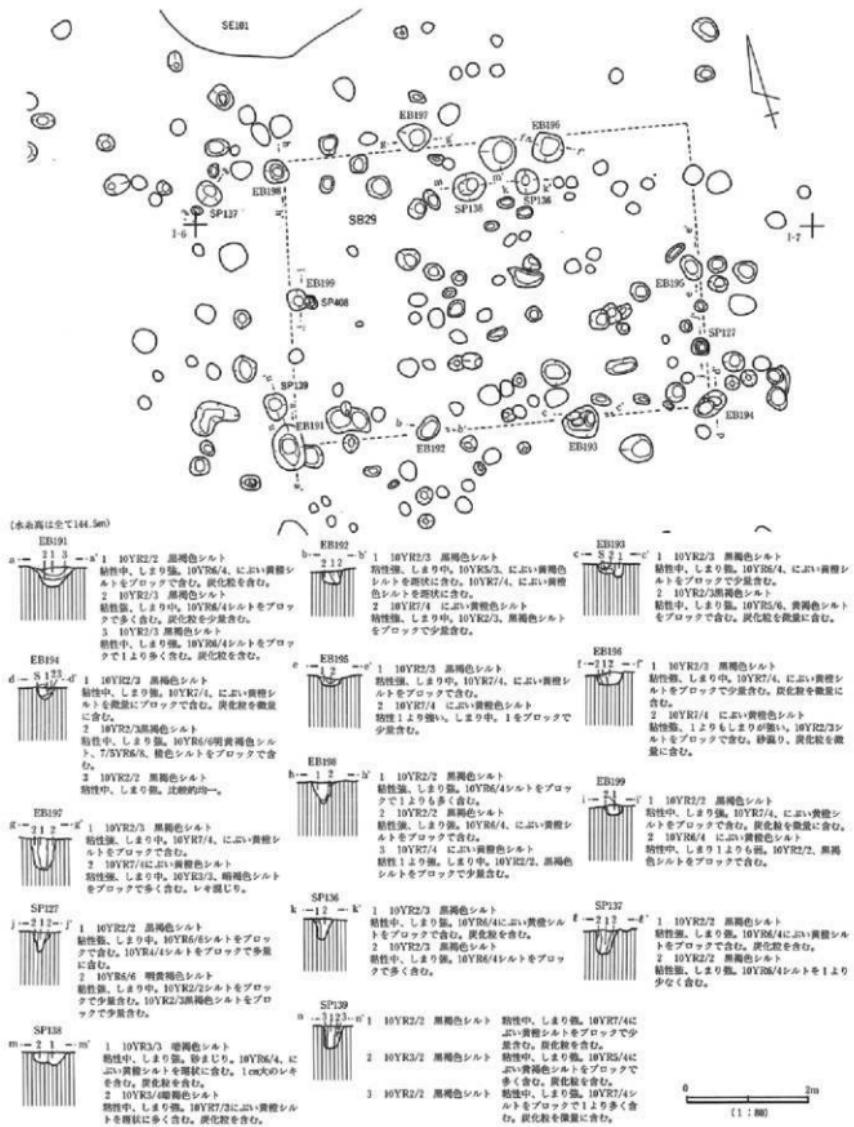
第17図 SB22・23掘立柱建物跡



第18図 S B 24・25掘立柱建物跡



第19図 S B 26+28掘立柱建物跡



第20図 S B 29掘立柱建物跡

表3 堀立柱建物跡観察表(1)

捕団番号	遺構番号	柱穴構成	方向	規模	柱間寸法	主柱穴掘り方・覆土	備考
第16回	S B21	3間×3間 (純柱) (底付)	南北軸 N-15°-E	梁行 8.6~8.9m 桁行 7.0~7.4m 約63m ²	梁行 2.8~3.1m 桁行 2.3~2.5m	径20~65cm。 不整円形、不整梢円形。 覆土は不明瞭でにぶい黄橙色シルト。 確認面からの深さは5~50cm。	東・西・北辺の3面に底と考えられる小柱穴巡る。小柱穴の深さは、主柱穴に比して概して浅い。
第17回	S B22	2間×3間 (純柱)	南北軸 N-18°-E	梁行 6.3m 桁行 4.9~5.1m 約31.5m ²	梁行 2.0~2.2m 桁行 2.4~2.5m	径30~50cm。 不整円形、不整梢円形。 覆土は不明瞭でにぶい黄橙色シルト。 確認面からの深さは20~50cm。	東辺から約3m地点に柵列(S A 555)が併走する。関連施設の可能性あり。
第17回	S B23	2間×2間	南北軸 N-23°-E	梁行 4.4~4.7m 桁行 3.5~3.6m 約16.1m ²	梁行 2.1~2.4m 桁行 130~224cm	径40~60cm。 不整円形、不整梢円形。 覆土は不明瞭でにぶい黄橙色シルト。 確認面からの深さは20~30cm。	南辺のE B82とE B89間は他より短い。
第18回	S B24	2間×2間 (純柱)	南北軸 N-13°-E	梁行 2.9~3.0m 桁行 2.8~2.9m 約8.4m ²	梁行 1.4~1.6m 桁行 1.4~1.6m	径30~50cm。 不整円形、不整梢円形。 覆土は不明瞭でにぶい黄橙色シルト。 確認面からの深さは15~25cm。	南辺部に小柱穴がし字状に付帯する。出入り口等の関連施設の可能性あり。

表4 挖立柱建物跡観察表(2)

掲図 番号	遺構 番号	柱穴構成	方向	規模	柱間寸法	主柱穴掘り方・覆土	備考
第 18 図	S B25	2間×2間	南北軸 N-18°-E	梁行 3.6~3.8m 桁行 3.1~3.8m 約12.8m ²	梁行 1.4~1.7m 桁行 1.6~1.9m	径30~50cm。 不整円形、不整梢円形。 覆土は不明瞭でにぶい黄褐色シルト。 確認面からの深さは 10~20cm。	北東端部の主柱穴 は未検出。 他の掘立柱建物跡 に比して柱穴の深さ が浅い。
第 19 図	S B26	2間×2間	南北軸 N-24°-E	梁行 2.8~2.9m 桁行 2.5~2.7m 約7.4m ²	梁行 1.4~1.5m 桁行 1.2~1.4m	径30~70cm。 不整円形、不整梢円形。 覆土は不明瞭でにぶい黄褐色シルト。 確認面からの深さは 15~40cm。	主柱穴脇に小柱 穴を巡らす。建物 同士の切り合いに はならず、柱穴に 関連する可能性あ り。
第 19 図	S B28	2間×2間	南北軸 N-21°-W	梁行 3.7~3.8m 桁行 3.4~3.6m 約13.1m ²	梁行 1.7~2.1m 桁行 1.7~1.8m	径40~80cm。 不整円形、不整梢円形。 覆土は不明瞭でにぶい黄褐色シルト。 確認面からの深さは 25~40cm。	北辺に併走する 形で浅い柱穴が並 ぶ。庇が付いた可 能性あり。
第 20 図	S B29	2間×3間	南北軸 N-13°-E	梁行 6.5~6.9m 桁行 4.5m 約30.2m ²	梁行 2.1~2.5m 桁行 2.1~2.5m	径30~60cm。 不整円形、不整梢円形。 覆土は不明瞭でにぶい黄褐色シルト。 確認面からの深さは 15~45cm。	北東端部の主柱 穴は未検出。 一部根固め石を 伴う主柱穴あり。

3 井戸跡

井戸跡は全部で3基検出されている。そのうちS E101は井戸材と思われる加工木が総数31本出土している。加工木の詳細なデータは観察表に譲るが、ここでは検出時の状況を示し、そこから考えられるS E101の形状を考えてみたい。

S E101（第23図） 覆土は黒褐色土を基調とし、下位でグライ化し粘性の強いシルトとなる。グライ化するあたりの地山は前述の砂礫層であり、この層もグライ化している。井戸材は列状に斜位で検出された。下方にケズリによる加工痕がそのほとんどに認められた。上方は腐植のため加工痕は確認不可能であった。井戸材は覆土中に浮いた状態で出土しており、井戸機能時の現状をとどめていない。材の直上からは直径15cm前後の中型礫がまとまって出土しており、同様の礫が造構南側壁面に貼りつく状態で検出されている。これらの状況からS E101の埋没過程において、東壁を支えていた材が東壁に貼りついていた礫群の崩落とともに、押し崩されたものと考えられる。

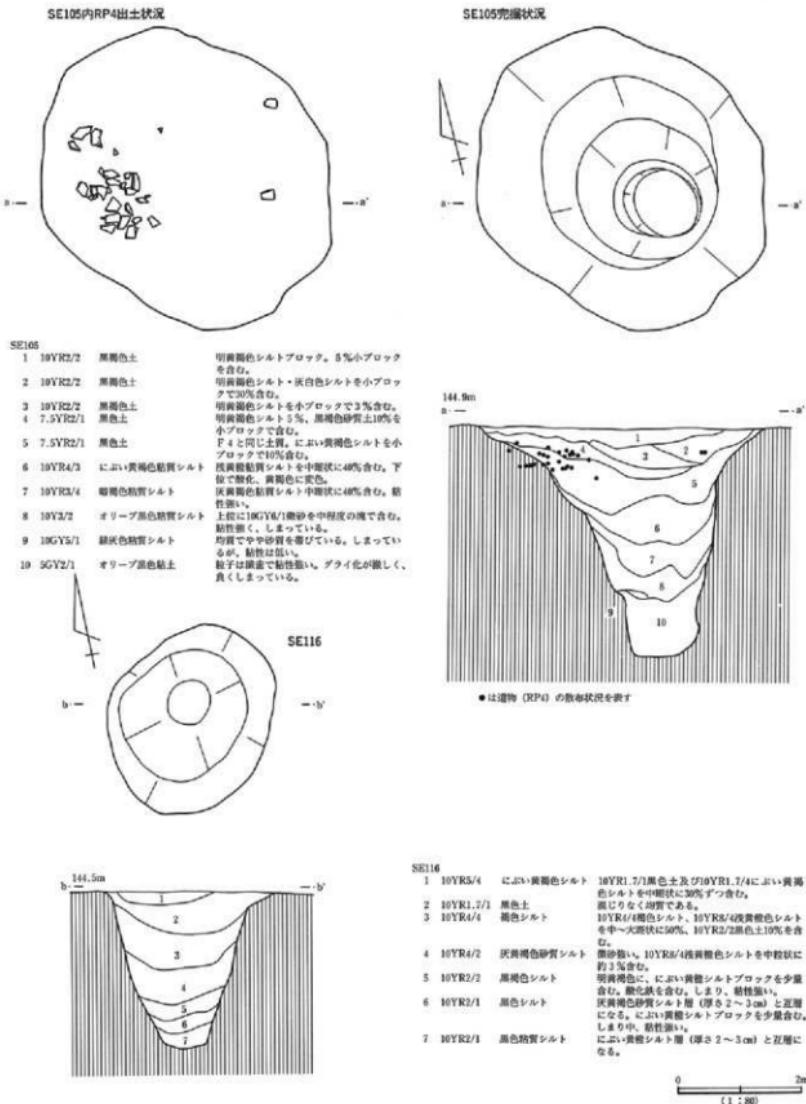
井戸底は平らで、北側（RW117）及び東側（RW101）に横桟を配し、RW101においては押さえ杭（RW102）を施した状況が見られた。西側及び北側には横桟はなかったが、井戸掘削時に当たった自然木を断ち割って構築した状況が見られた。

断面形状からは本体と掘り方の区別はつかないため、逆円錐状に掘った後、垂直に掘り込み、材を横桟及び縦板に構築し、逆円錐部分の壁面に礫を配して使用したものと思われる。

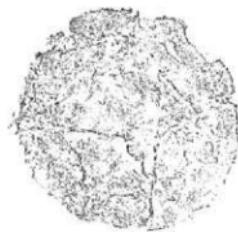
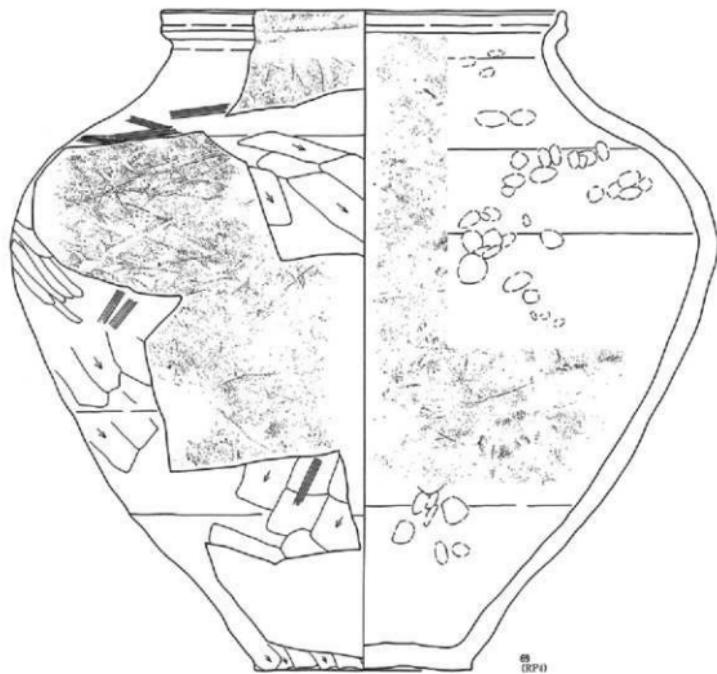
その他の遺物としては、須恵器壺破片が3点覆土中から出土しているだけで、時期決定の根拠となる遺物は出土していない。遺構の検出状況から、構築に礫を使用していること・板材の遺存状態が新しいこと等から、古代よりは比較的新しい時代の中世において作られたものではないかと推測される。

S E105（第21図） 素掘りの井戸である。精査当初は土坑と考えられたが、その後の断ち割り調査によって井戸であることが判明した。覆土下位はS E101と同様にグライ化する粘土質シルトである。時期を決定する遺物は出土していない。土層観察から下位～中位にかけては一括埋土の可能性が高い状況が窺える。また、中位～上位にかけての黒褐色土中からは壺器系陶器甕（RP4）が出土している。この前後を境に土層が大きく変化していることから、埋没の一時期に廃棄土坑としての性格を担ったものと思われる。

S E116（第21図） 素掘りの井戸である。前述の2者に比べて、平面プランは小さく、大人一人が入るのがやっとの状況である。掘り方は判然としない。土坑もしくは柱穴かと思われたが、断ち割り調査を行い、その深さから井戸跡と判断した。遺物は全く出土しないため時期決定はできない。現状でも、漏水している状況が見られたことも、井戸跡と判断した要因である。土層観察からは一括で埋められた状況が見られた。



第21図 S E 105-116井戸跡



— 33 —

第22図 S E 105出土瓷器系陶器

井戸跡出土遺物

S E105出土瓷器系陶器甕（第22図）

出土品は1個体である。3分の1の遺存だが完形に近い形に復元できた。大きさは器高53.6cm、幅58.0cmで中世の時期の甕としては中型品の部類に入る。以下は遺物の観察結果を記す。

口縁部は外側に幅2.5cmの口縁帯を持つ。口縁上端は丸みを帯び、やや外反ぎみながら垂直に立ち上がる。内面では、明瞭な受け口はつくらず、ゆるやかに頸部に下りてくる。縁帯中央部は凹状の形状を示し、下端に向かって上端よりも大きく盛り上がる稜を成す。

口縁端部はやや丸みを持ち、外側に明瞭な口縁帯を形成しない。調整は内外面ともにハケメ調整が行われる。また、内面には頸部から下方は成形時の指頭圧痕及びヨコナデがみられる。

頸部から肩部にかけては、わずかにくびれた後、「八」の字状に外傾する。肩部は丸みを帯びながら張り出す。最大径は器底から約3分の2の位置である。

体部中央から下部にかけては、やや丸みを帯びる部分と直線的な部分とがあり、全体的にややいびつとなる。また整形も粗雑である。体部の調整にはヘラ磨きの後、数種類の板状工具によるハケメが施されているが、緻密であるとは言い難く粗雑な作りに終始する。

底部は平坦で安定している。回転台によるヘラ起こし痕がみられる以外は特徴的なものは見られない。切り離し後は大きな調整を施した痕跡はみられない。

胎土は非常に緻密で均質であり含有物は少ない。全体的に赤褐色に焼けており焼成温度が十分上がらなかったことが窺い知れる。焼成状態は体部上半から口縁部は比較的固く焼き締まっているが、体部下半から底部は多孔質になり、もう一面が垣間見られる。

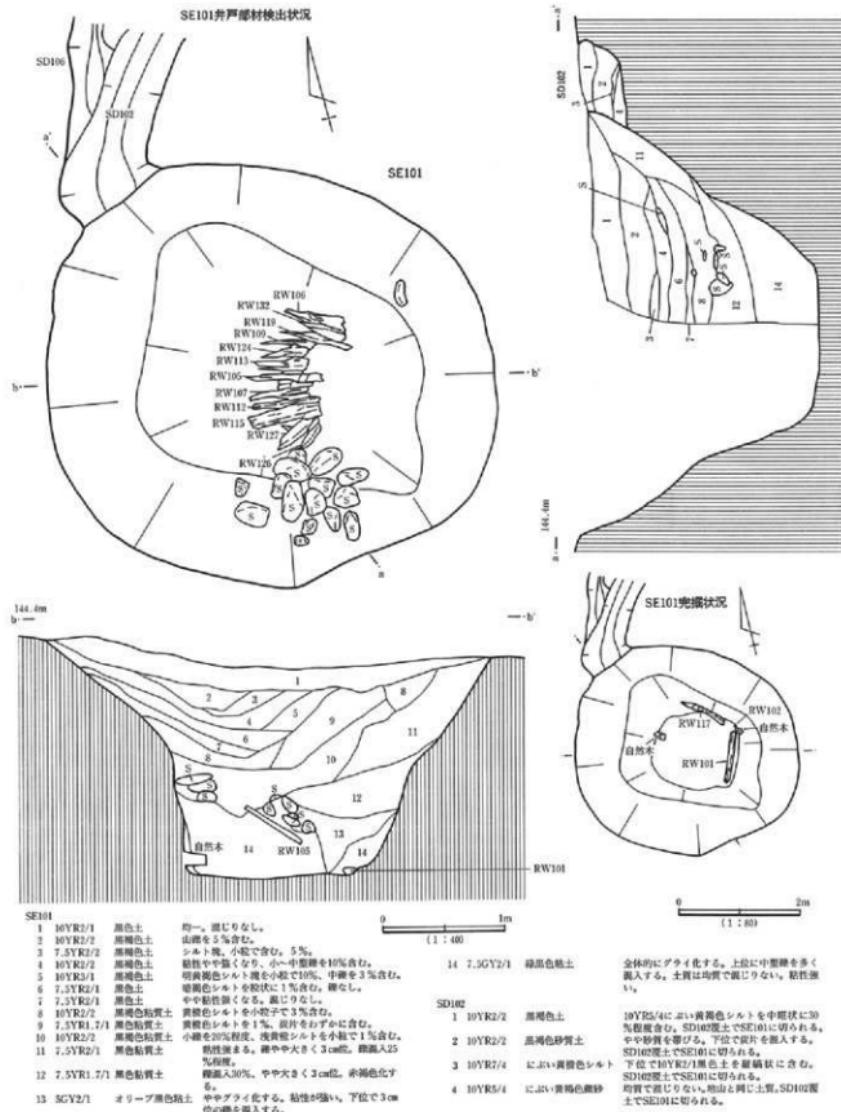
常滑産にみられる長石の含有はほとんど観察できなかった。

宮城県白石市一本杉窯跡出土甕との胎土比較を行ったが、本遺跡の胎土の方が緻密であり、鉄分の吹き出しもなかったことから窯跡の特定には至らなかった。

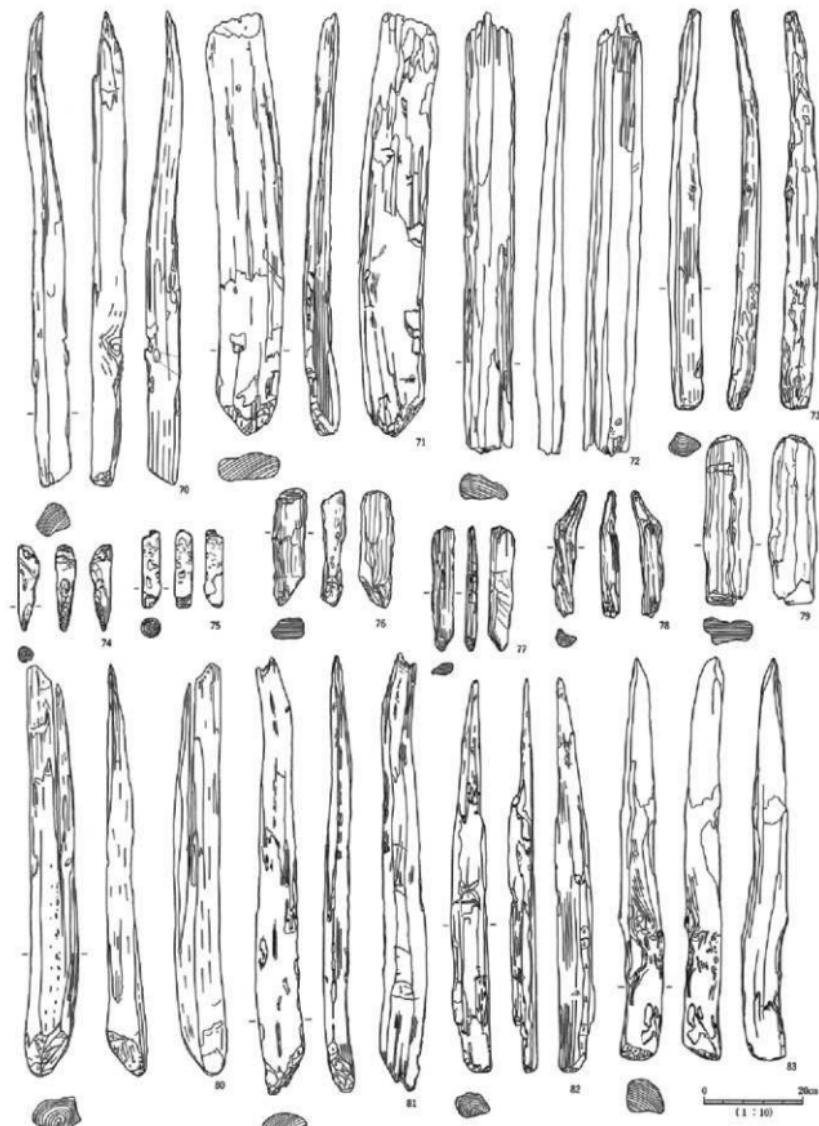
S E101出土井戸部材（第24・25図）

31点が出土した。樹種は全てクリ材と思われる。横桟と考えられるものは72(R W101)・96(R W117)である。その他のものは縦板と考えられるが、現状をとどめていないため詳細は不明である。部材は断面形状から以下のように大きく3つに分類できる。

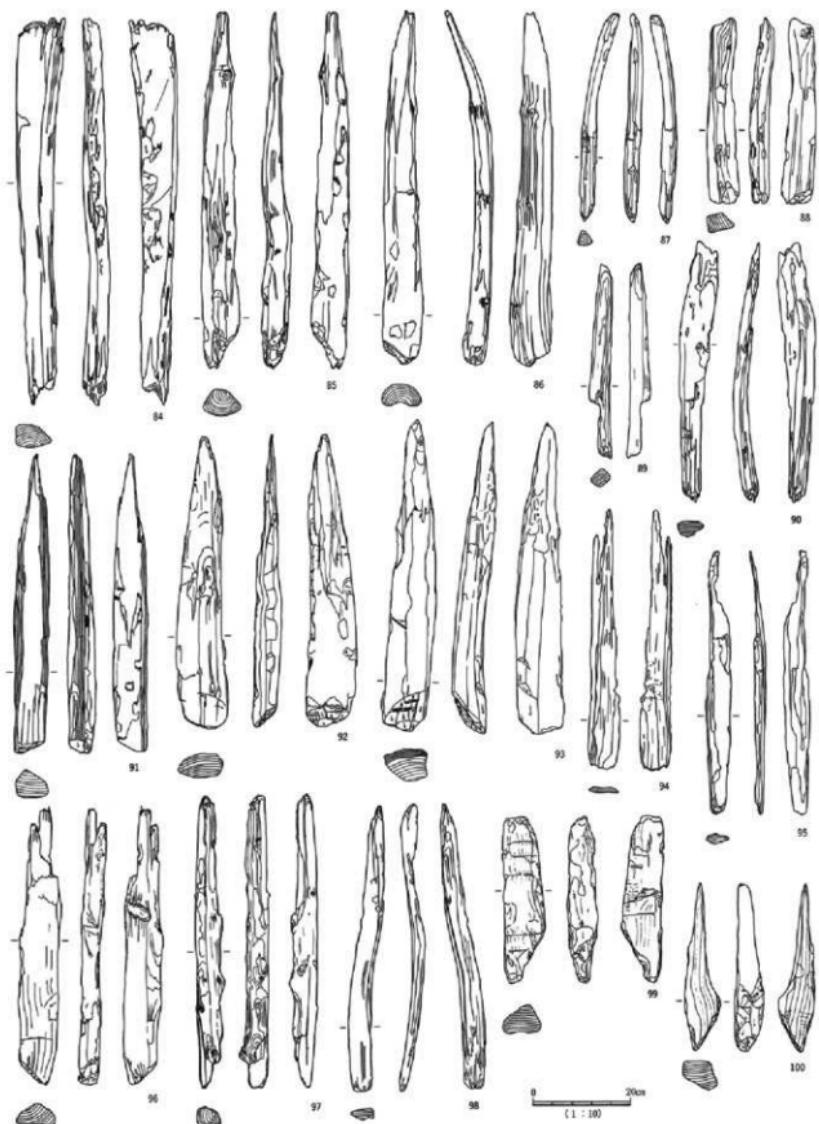
A類 断面が円形のもの B類 断面が三角形のもの C類 断面が方形のもの D類 断面が板状のもの
73・78・87・88・90・94・97・98の8点を除いては下方に全て割り痕が観察できる。上方は腐植により消失しているため観察は不可能であるが、何等かの材の転用があったものと思われる。部材同士の接合を試みたが、接合する部材は一つもなかった。C・D類の部材は表面が全て面取りが行われている。それぞれ独立した材として機能していたものを転用したと思われる。A類・B類の一部については表面の加工等は確認不可能な状態であった。



第23図 S E 101井戸跡



第24図 S E 101井戸跡出土井戸部材(1)



第25図 S E 101井戸跡出土井戸部材(2)

表5 S E101井戸部材観察表

埠団 番号	遺物 番号	部位	分類	計測値(mm)			R/W 番号	調整加工	出土地点	備考
				長さ	幅	厚さ				
24	70	縦板	B	971	70	65	105	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。
	71	縦板	D	869	128	50	115	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。
	72	横桟	D	898	97	53	101	先端部ケズリ加工痕	SE101Y	転用材か?井戸底面東側より出土。
	73	縦板	B	820	65	47	109	確認不可	SE101F	上部、腐植により欠損。
	74	横桟脚え杭	A	175	43	30	102	先端部ケズリ加工痕	SE101Y	RW101を北側で固定する状態で出土。
	75	不明	A	159	36	39	130	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。
	76	縦板	C	240	66	44	123	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。
	77	不明	B	258	45	23	116	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。
	78	不明	A	257	46	35	114	確認不可	SE101F	上部、腐植により欠損。
	79	不明	C	346	99	53	125	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。
	80	縦板	C	841	98	74	113	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。
	81	縦板	D	894	89	49	107	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。
	82	縦板	C	800	71	50	119	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。
	83	縦板	C	822	86	75	112	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。
25	84	縦板	C	785	91	49	128	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。
	85	縦板	B	726	73	52	126	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。
	86	縦板	D	720	82	43	127	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。
	87	縦板?	B	424	31	31	111	確認不可	SE101F	上部、腐植により欠損。
	88	縦板?	C	387	62	38	121	確認不可	SE101F	上部、腐植により欠損。
	89	縦板?	C	398	43	35	120	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。
	90	縦板?	B	530	67	32	103	確認不可	SE101F	上部、腐植により欠損。
	91	縦板	B	608	65	56	106	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。
	92	縦板	C	596	108	48	132	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。
	93	縦板	C	633	90	65	124	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。
	94	縦板?	D	534	65	10	108	確認不可	SE101F	上部、腐植により欠損。
	95	縦板?	D	537	49	20	104	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。
	96	横桟	B	566	80	43	117	先端部ケズリ加工痕	SE101Y	転用材か?井戸底面北側より出土。
	97	縦板	A	598	54	45	135	確認不可	SE101F	上部、腐植により欠損。
	98	縦板	D	582	46	27	131	確認不可	SE101F	上部、腐植により欠損。
	99	不明	B	341	82	58	122	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。
	100	不明	C	343	73	58	118	先端部ケズリ加工痕	SE101F	転用材か?上部、腐植により欠損。

4 土坑（第26図）

本遺跡では、3区の一段下がった平坦部に、遺物を含む土坑が集中する傾向が窺える。遺物はほとんどが破片にして数点の出土であるが、中には完形土器を含む土坑も確認されている。

S K104 径45cm前後の規模で検出面から最深で24cmの深さを有する。ロクロ使用の土師器甕、須恵器坏、手づくねの土師器甕等が供伴する形で出土した。遺物数は破片を含めて7点である。遺物の出土状況から一括廃棄と思われ、祭祀的意味合いが推測される。時期は9世紀後半と思われるが、須恵器坏は住居跡出土遺物とは趣を異にする。住居跡とは時期差が考えられる。

S K107 3区 S K104に隣接して検出。径45cm前後の規模で検出面から最深で24cmの深さを有する。底部に網代痕のある土師器甕（101）須恵器甕（107）が出土した。

S K103 3区の一段下がる面へ傾斜変換する斜面上で検出された。長軸252cm・短軸228cmの規模で検出面から最深で34cmの深さを有する。2層と5層に砂質の強いシルトが流入堆積する。堆積土は南方から北方へ堆積していく様相が観察でき、地表は遺構の構築時に既に傾斜していたことがわかる。遺物は3層中からロクロ成形の土師器甕の破片3点が出土した。

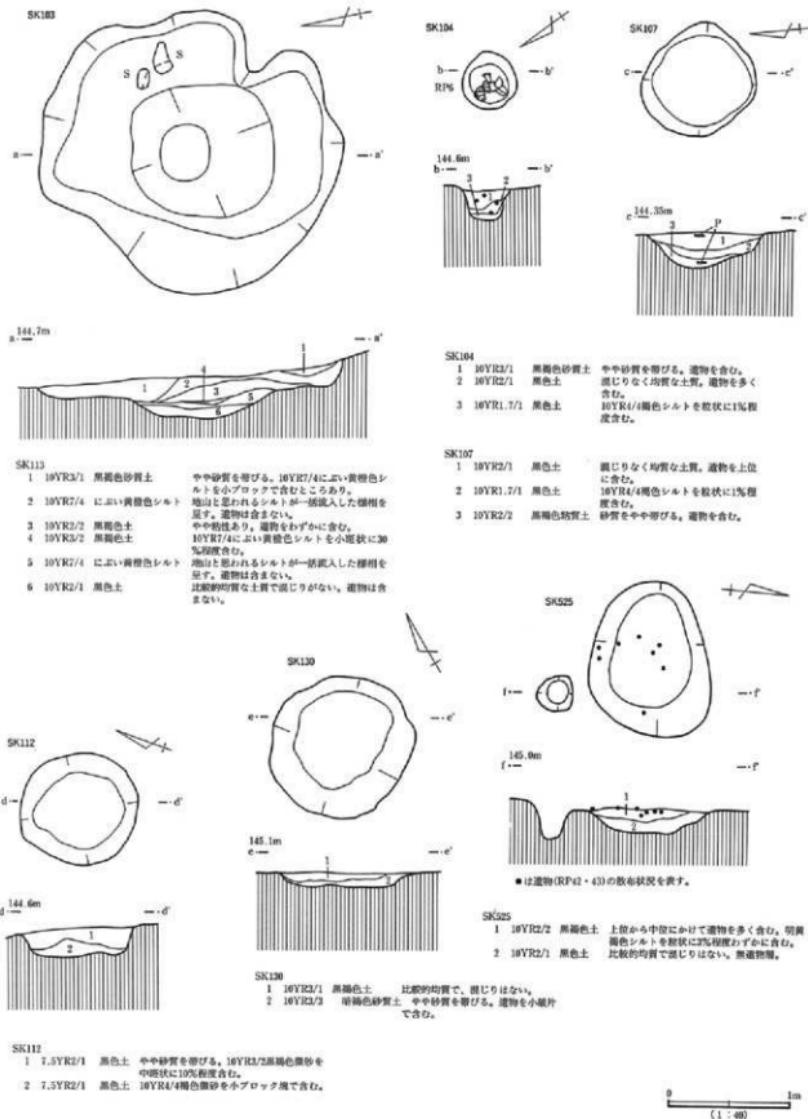
S K525 S T10西辺の壁面に接して検出された。長軸125cm・短軸88cmの規模で検出面から最深で20cmの深さを有する。遺物は1層中に集中し、土師器甕の破片1点と須恵器甕（R P42・43）が出土した。

S K112 3区 S K104付近で検出。長軸90cm・短軸80cmの規模で検出面から最深で23cmの深さを有する。底面は平坦で遺物は出土していない。

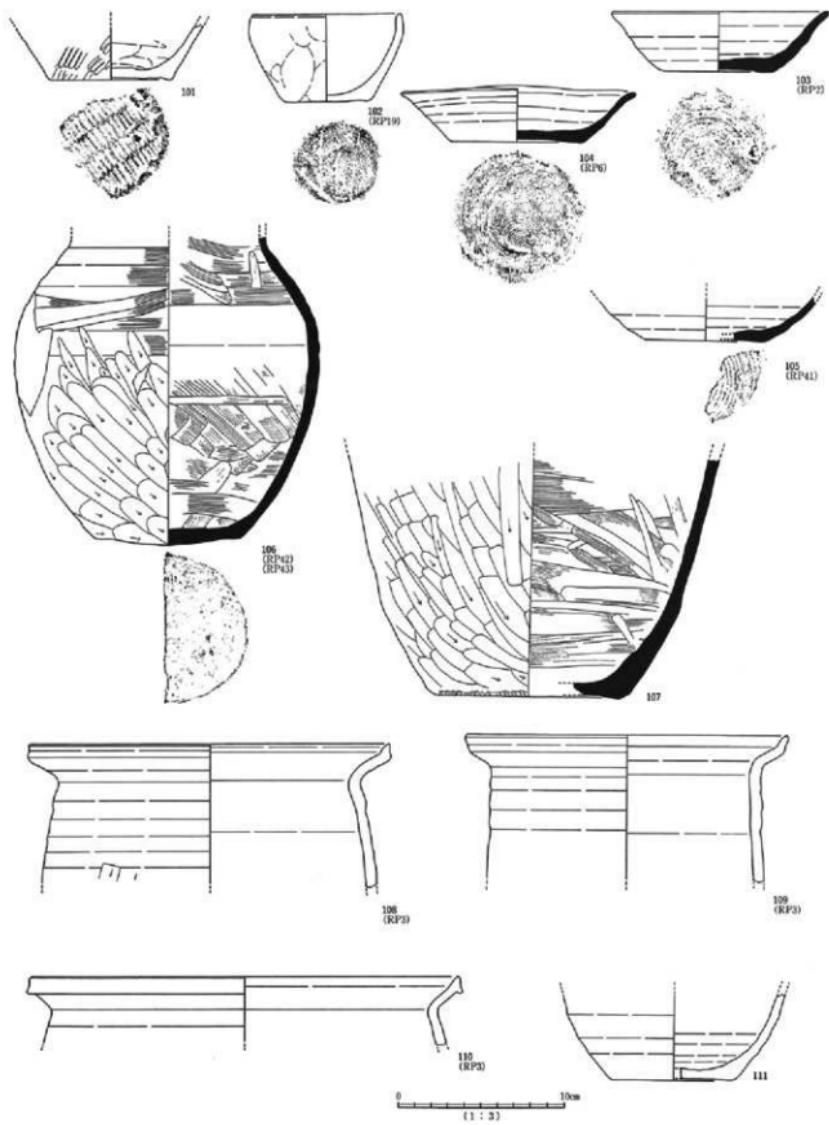
S K130 2区 S D117の北側に隣接して検出された。径115cmの円形プランで、検出面から最深で11cmと浅い。底面は平坦で遺物は平安時代の土師器を破片で8点出土した。

出土遺物（第27図）

102は土師器甕と思われる。外面はケズリ・ヘラミガキが施され、ロクロは使用していない。口縁部をヨコナデ調整しており、当初からこの器形で成形されたと思われる。底部内面は弯曲し、ナデ調整されている。底部外面は成形時の痕跡を残し、沈線が2本併走する状況が観察できるが詳細は不明である。101は底部に網代痕を残す土師器甕で内外面ヘラミガキの調整が施される。胎土は比較的固く焼き締まる。103・104は共にS K104からの出土で供伴関係にある。どちらも回転糸切りでナデ調整が行われている。103はS T 4出土須恵器と法量は酷似するが、口縁部はやや外反する。104は趣を異にし、底径が広く器高がやや低く、体部が緩やかに弯曲しながら外反する形態である。105・106はS K525から出土した須恵器甕である。105はロクロ成形で甕もしくは壺の器形と思われるが詳細は不明。底部は静止糸切りである。106はロクロ成形後ヘラおこしで切り離し、頸部～体部にかけて刷毛目、体部下半にケズリによる調整を施す。内面は底部まで刷毛目を施す。107は甕もしくは壺と思われる。底部切り離し不明でケズリ調整あり。108～110はS K104出土の土師器甕の口縁部である。108は口唇部垂直に立ち上がり端部は下がらない。ロクロ成形後ヘラケズリかミガキを行う。109は口唇部外側し縁端部中央に沈線状に段がつく。磨減が激しく調整不明。110は縁端部が張り出し縁端下部が下がる。111はS K104出土の土師器甕の底部で磨減が進み、内外面底部とも調整切り離し不明。



第26図 土坑



第27図 土坑内出土遺物

5 溝状遺構・柱穴

S D102・106・109・110・111（第28図）

S E101の周辺から検出された溝状遺構群である。S E101との関連が考えられるがS D102・106とS E101の間に覆土に重複関係が見られた（第23図）。底面でのレベルを計測したところ、S D102は両端でほぼ一定、S D106は南から北にかけて比高差約7cm下りS D102に至ることがわかった。S D102との最大比高差は約17cmで106の方が高い。S D102と106は重複関係が看取されたが、覆土が酷似していること・掘り方が似ていること等からS D102の一部がS D106へバイパス的に接続されたと見ることができる。その証拠にS D102の最下層覆土が均質なぶい黄褐色微砂であることから、隣接する河川の氾濫等で底部が一括である程度埋まりその機能を果たさなくなつたためS D106で補修したという推測ができる。その機能を一義的に排水と考えれば106の底部レベルが102の隣接ポイントレベルより高いことは合点がいく。ここでは推測の域を出ないが、S E101の排水機能を両溝状遺構が担っていたことも考えられよう。

S D109・110・111もS E101との関連性が考えられるが、遺存状態が悪いことから不明な点が多い。遺物も出土しなかつたためここでは紹介に留めたいと思う。

S D131・S D118（第29図）

S D131はS B22南辺に併走する形で検出された溝状遺構である。S D118を切っていることから掘立柱建物跡に関わる遺構の可能性が高い。遺物は出土していない。

S D118は調査区南端から北へ走る溝である。当初は後世の暗渠かそれに類するものかと思われたが、覆土の土質及び埋没状況等から遺構であると判断した。時期については、出土遺物が土師器を1点破片で含むのみで時期決定できるものは出土していない。S D131と切り合い関係が成立し、S D131より古いことから、少なくとも中世かそれ以前の溝であると思われる。

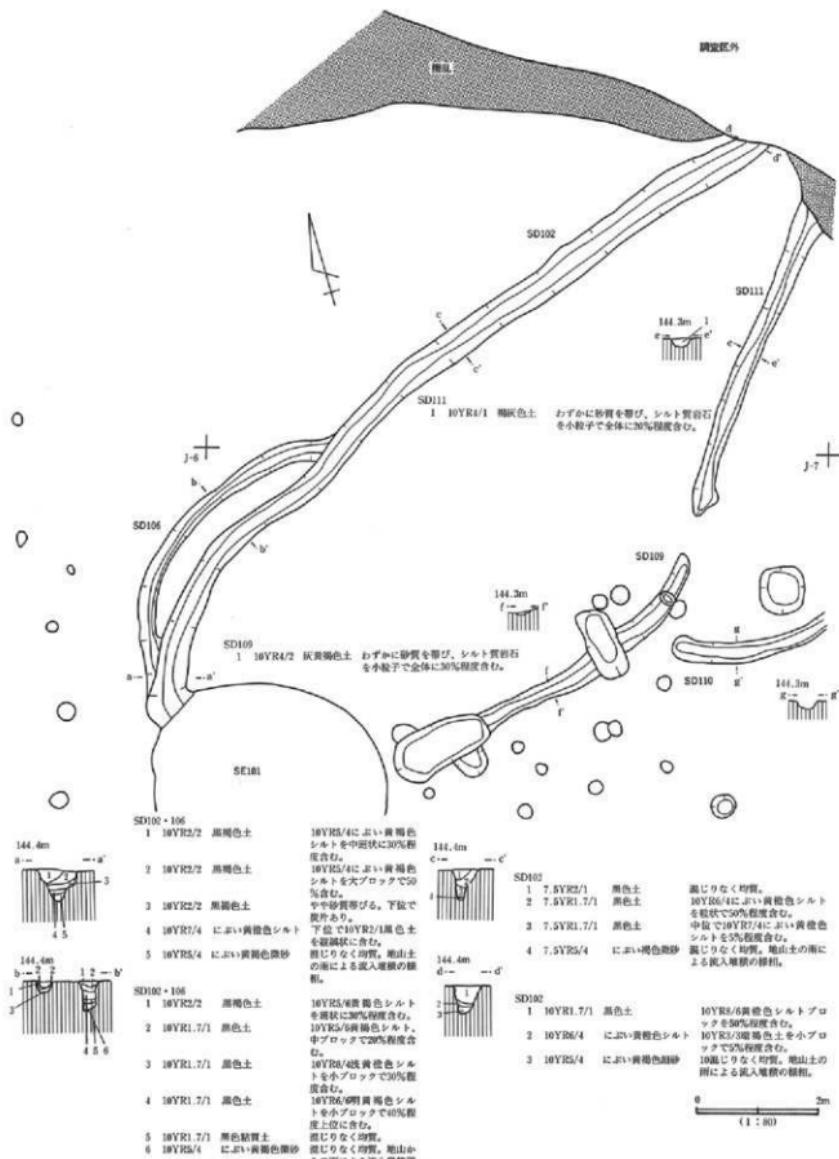
S D117（第29図）

調査区2区I-3グリッド～I-5グリッドにかけて東西に走る溝状遺構である。出土遺物は覆土上層で須恵器12点・土師器4点を破片で含む。覆土の状況やS T10との切り合い、主軸方向等から中世の溝かと思われる。

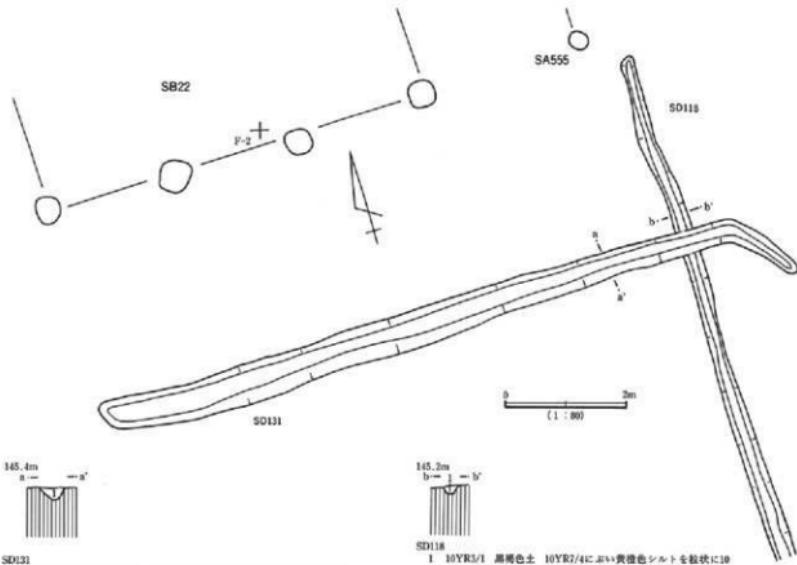
柱穴（付図 遺構配置図）

本遺跡では無数の小柱穴が検出され、ピット状の浅いものも含むと1,300基以上確認された。それらのほとんどは均質な黒色土の覆土で、掘り方は伴わなかった。直線状に配列するものは柵列と考えプランを提示した。（S A31・S A555）

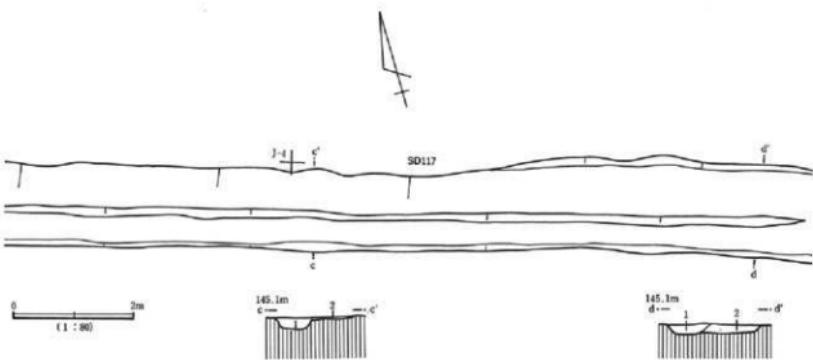
柱穴の中には底面に河原石を配したものも6基検出され根固めの石と推測されたが、それだけでは建物を構成することはできなかった。遺構番号は次のとおりである。（E B193・194、S P231・298・401・408・463・556・557・558）



第28図 溝状遺構(1)



SD131
1 10YR3/3 黄褐色シルト 10YR7/4に由る黄褐色シルトを中ブロックで全体に程度で40%程度含む。SD118を切る。



SD117
1 10YR2/1 黒色土 粘りはほとんどなく均質である。遺物を小破片で含む。
2 10YR3/1 黄褐色砂質土 サラサ質を帯びる。小砂礫(約5mm~1cm程度)をわずかに混入する。

第29図 溝状遺構(2)

6 その他の出土遺物（第29図）

縄文時代の石製品

本遺跡は当初縄文時代の遺構が確認される可能性が示唆されていたが、調査の結果からは明らかに縄文時代の遺構になるものは確認できなかった。しかしながら、表土中から総数351点の石器剝片が出土し、内7点が石製品と認められるため、図化し掲載することとした。

119・120は搔器と思われる。121・123は石窓である。121は石槍、124は石錐と思われるが時期ははっきりしない。125は凹石で片面の凹みは複数の使用痕と思われる痕跡が観察された。

その他の出土した剝片の中にも、剝離面に二次加工を施して使用したと思われるものがやや確認できたが、紙面の都合上割愛させて頂いた。

平安時代の遺物

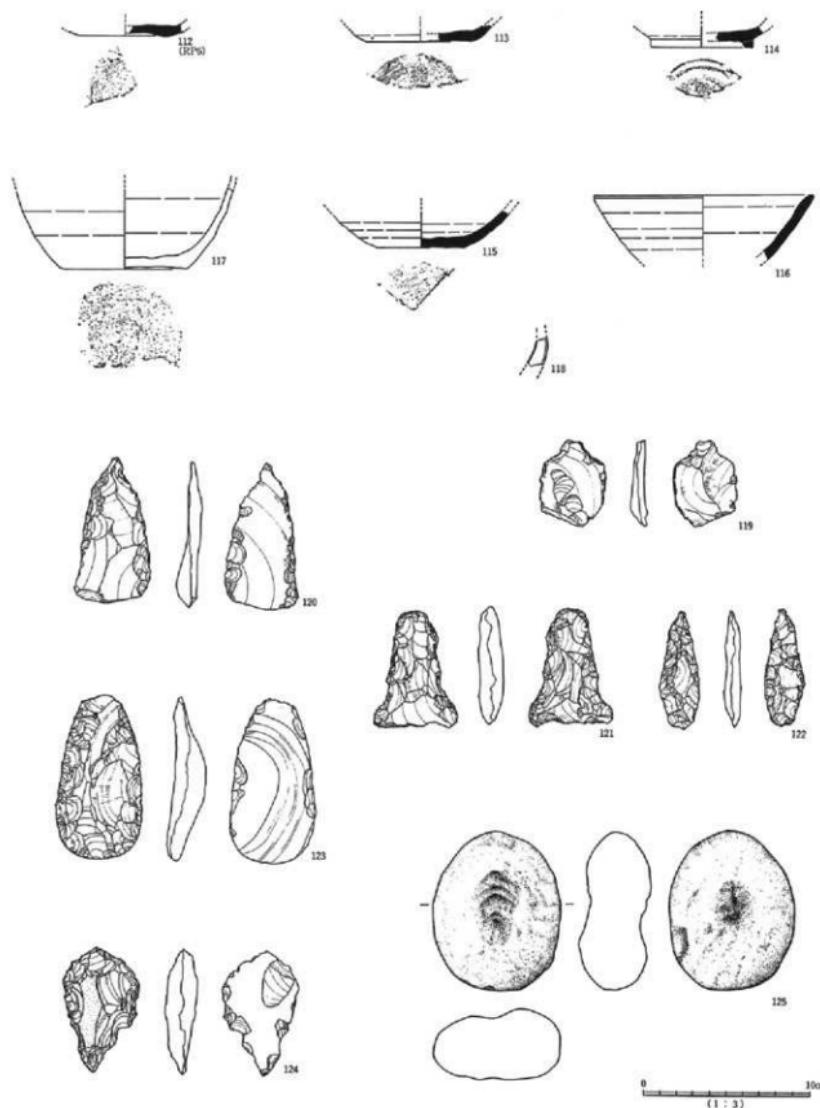
グリッド出土遺物の中で、個体として認識できるものを6点図化した。5点が須恵器坏で内1点は高台付である。5点中4点は底部が残存し、回転糸切りの無調整であることが確認でき、それらが9世紀後半のものである可能性が高く、住居跡出土遺物と時期的に大きな差がないことが窺える。117は土師器甕である。体部下半及び底部のみの残存で、底部の切り離しは磨滅が激しく判然としない。体部にロクロ目がみられることから回転糸切りによるものとも推測されるが、明らかではない。

中世の遺物

明らかに中世の遺物として出土しているものは、118の青磁破片が挙げられる。器種は碗と考えられるが、小破片のため判断はできない。胎土の質感や釉薬の状況から13世紀以降に生産されたものと考えられるが詳細は不明である。面整理時にI-5グリッドから出土した。このほかにも青磁が2点破片で近接グリッドから出土したが、極小破片のため図化は行なっていない。これらの青磁類は掘立柱建物跡群に近いグリッドから出土していることから、その関連性が示唆できるが、確証を得る状況は見られなかった。

表6 井戸跡観察表

遺構番号	検出グリッド	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	形状	出土遺物
S E101	I-6・7 グリッド	366	344	172	石組み及び 木製井戸枠	破片須恵器6点・土師器5点 木製品(井戸部材)31点
S E105	I-8 グリッド	258	214	187	素掘り	R P 4 姿器系陶器甕
S E116	I-7 グリッド	159	129	179	素掘り	なし



第30図 その他の出土遺物

表7 出土土器観察表(1)

項目	遺物番号	種別	種類	寸法測定(cm)			底盤 (上段 下段 内側) 外 面	底盤 (上段 下段 内側) 内 面	用途	出土点	RP番号	備考			
				C径	B径	高さ									
6	1	須恵器	壺			21	タタキ	アテ底	ST1	13	体部のみ。中央部にゆがみあり。				
	2	須恵器	壺			15	タタキ	アテ底	ST1	14	体部のみ				
	3	須恵器	壺			12	タタキ	アテ底	ST1	46	体部のみ				
	4	須恵器	壺	300	7	不明	タタキ		ST1	49	底部のみ				
	5	土師器	壺	76	7	不明	ロクロ底	ロクロ底	ST1	21・22	底部のみ				
	6	土師器	壺	360	7	不明	ロクロ底	ロクロ底	ST1	16・20	底部～体部のみ				
	7	土師器	壺	320	8	不明	ケズリ 不明	不明 不明	ST1	10	底部～体部のみ				
	8	土師器	羽釜	150	4	不明	ロクロ底	ロクロ底	ST1	10	底部～体部のみ				
	9	土師器	壺	170	6	静止余切	ロクロ底	ロクロ底	ST1	5	底部～体部下半のみ				
	10	土師器	壺	54	4	静止余切	不明	不明	ST1	21	底部のみ				
7	11	土師器	壺	149	7		ロクロ底 刷毛目	ロクロ底 刷毛目	ST1	29	口縁～裏面にかけてのみ				
	12	土師器	壺	149	8		ロクロ底 不明	ロクロ底 不明	ST1 E L12I		ロクロ底のみ				
	13	土師器	壺	180	5		ロクロ底	ロクロ底	ST1	8	ロクロ底のみ				
	14	土師器	壺	140	7		ロクロ底	ロクロ底	ST1	9	ロクロ底のみ				
	15	土師器	壺	180	6		ロクロ底	ロクロ底	ST1	9	ロクロ底のみ				
	16	土師器	壺	170	5		ロクロ底	ロクロ底	ST1	8	ロクロ底のみ				
	17	土師器	壺	180	6		ロクロ底	ロクロ底	ST1	9	ロクロ底のみ				
	18	土師器	羽釜	170	5		ロクロ底	ロクロ底	ST1	21・22	ロクロ底のみ				
9	21	須恵器	壺	136	60	38.5	3	回転余切	ロクロ底	ロクロ底	ST2	168	ほぼ完形		
	22	須恵器	片		68	4	回転余切	ロクロ底	ロクロ底	S D12I	51	底部から体部下半のみ			
	23	須恵器	壺			8	タタキ	アテ底	ST2	165	体部のみ				
	24	須恵器	壺			15	タタキ	アテ底	ST2	165	体部のみ				
	25	土師器	壺	139	4		ロクロ底	ロクロ底	ST2	166	ロクロ底のみ				
	26	土師器	壺	143	3		ロクロ底	ロクロ底	S D12S		ロクロ底のみ				
	27	土師器	壺	143	3		ロクロ底	ロクロ底	ST2	167	ロクロ底のみ				
	28	土師器	圓	(72)	3	不明 不明	ロクロ底	ロクロ底	ST2	167	底盤のみ				
	29	須恵器	壺	133	28	6	ヘラ切	ロクロ底 刷毛目	ロクロ底 刷毛目	SK329	157	ST4埋造地の土坑、ST4及び5との間通			
	30	須恵器	片	140	65	37	4	回転余切 ナダ	ロクロ底 刷毛目	ロクロ底 刷毛目	ST4	66	ほぼ完形		
11	31	須恵器	片	142	66	41	5	回転余切	ロクロ底 刷毛目	ロクロ底 刷毛目	SK329 Y	158	ST4埋造地の土坑、ST4及び5との間通		
	32	須恵器	片	(22)		4	不明	ロクロ底 刷毛目	ロクロ底 刷毛目	ST8	152	ロクロ底のみ			
	33	土師器	片	138	67	36	3	回転余切 ナダ	ロクロ底 刷毛目	ロクロ底 刷毛目	ST4	160	変形		
	34	土師器	壺	(71)	4		不明	ロクロ底	ロクロ底	ST4	64	底部～体部のみ			
	35	土師器	壺	84	7	不明	ロクロ底	ロクロ底	ST4	74	底盤のみ				
	36	土師器	壺	80	3	不明	ロクロ底	ロクロ底	ST4	154	底部のみ				
	37	土師器	壺	100	5	不明	不明	不明	ST4 E K14I	69	底部～体部のみ				
	38	土師器	壺	78	6	回転余切	ロクロ底	ロクロ底	ST4	64・66	ロクロ底のみ				
	39	土師器	壺	84	6	不明	ケズリ	不明	ST4	56	底部～体部のみ				
	40	土師器	壺	(77)	6	不明	ケズリ	ミガキ	ST4	61	底部～体部のみ				
	41	土師器	壺	90	4	不明	ケズリ	ミガキ	ST4 E K14I	66・75	底部～体部のみ				
	42	土師器	壺	126	4	不明	不明	ミガキ	ST4	61	底部～体部のみ				
	43	土師器	壺	(80)	5	不明	ロクロ底	ロクロ底	ST6	153・94	底部～体部下半のみ				
	44	土師器	壺	80	3	不明	不明		ST4	58	底部～体部のみ				
	45	黑色土器	片	(76)	4	不明	ケズリ	ミガキ	ST5		表面1/6のみ				

表8 出土土器観察表(2)

検出 番号	遺物 番号	種別	種類	寸測値(mm)			底部 (上段・底部) (下段・側面)	拭拭(上段・成形 下段・調節)	外 囲	内 面	出土地点	RP番号	備 考		
				口径	底径	高さ									
12	46	直底器	直	639		7	不明	ロクロ底→タスキ 側面切	ロクロ底→アテ底 側面切	ST4	56	口縁～底部のみ			
	47	土師器	直	639		6		ロクロ底	ロクロ底	ST4	58	口縁部のみ			
	48	土師器	直	639		8		ロクロ底	ロクロ底	ST4	61	口縁部のみ			
	49	土師器	直	639				ロクロ底	ロクロ底	ST4 EK151		口縁部のみ			
	50	土師器	直	649	78	102	4	回転底切	ロクロ底 側面切	ロクロ底	ST4	61・67	1/2の遺存		
	51	土師器	直	640		6		ロクロ底	ロクロ底	ST4	61	口縁部のみ			
13	52	土師器	直	636		6		ロクロ底→ケズリ 側面切	ロクロ底 側面切	ST4	59・159	口縁部～体部			
	53	土師器	直	626		8		ロクロ底→ケズリ	ロクロ底	ST4	53	1/2の遺存。底部欠損			
	54	土師器	直	160		5		ロクロ底 不明	ロクロ底 不明	ST5	164	口縁部のみ			
	55	土師器	直	636		5		ロクロ底	ロクロ底	SK528 Y		口縁部のみ			
	56	土師器	直	639		5		ロクロ底	ロクロ底	ST6	83	口縁部のみ			
	57	土師器	直	216		7		ロクロ底→ケズリ	ロクロ底	ST5	73	口縁部～体部 底部欠損			
15	58	土師器	直	277	115	195	8	不明	ロクロ底→ケズリ 側面切	ロクロ底 側面切	SK528 Y	156	ほぼ完形		
	59	土師器	直	194		6		削毛目	削毛目	SK5		口縁部～体部上半のみ			
	60	直底器	直	137	32	6	ケズリ	ロクロ底→ケズリ 側面切	ロクロ底	ST10 Y	144・155	EPIH16Y出土箇所と接合(図版5)			
	61	直底器	坪	630	32	34.5	4	回転底切 ナガ	ロクロ底	ロクロ底	ST9	1	J-3グリッフ出土破片と接合		
	64	直底器	坪	132	(66)	36	4	回転底切 ナガ	ロクロ底	ロクロ底	ST10	28	1/5のみ遺存		
	65	直底器	坪	630		3	不明	ロクロ底	ロクロ底	ST10	146・28	口縁～体部1/4のみ、底部欠損			
15	66	土師器	直	636		7		ロクロ底	ロクロ底	ST10	145	口縁部のみ			
	67	土師器	直	95		6	不明	ケズリ	ケズリ	ST10	24	口縁部～体部のみ			
	68	土師器	直	144	74	131	5	回転底切	ロクロ底	ロクロ底	ST10	36・36・36	ほぼ完形		
	69	直底器	直	326	180	536	15	ヘラ切	ケズリ→ミガキ 削毛目	アテ底 削毛目	SE165 F	4	SE165埋設後、周辺土坑として存在		
	101	土師器	直	621		5	側面底	ミガキ	ミガキ	SK167		底部～体部のみ			
	102	土師器	圓	92	50	53	5	不明	ケズリ→ミガキ 不明	SK164	19	ほぼ完形			
27	103	直底器	坪	132	65	36.5	5	回転底切 ナガ	ロクロ底	ロクロ底	SK164	2	空形		
	104	直底器	坪	141	80	34	3	回転底切 ナガ	ロクロ底	ロクロ底	SK164	6	ほぼ完形		
	105	直底器	直	174		4	鉢足切	ロクロ底 削毛目	ロクロ底 削毛目	SK325 F	41	底部～体部下半のみ			
	106	直底器	直	90		6	ヘラ切	ロクロ底 削毛目	ロクロ底 削毛目	SK325 F	42・43	上面以上は欠損			
	107	直底器	直	136		6	不明	ケズリ	ケズリ	SK107		体部上半部以上は欠損			
	108	土師器	直	639		7		ロクロ底 ミガキ	ロクロ底	SK101	3	口縁部のみ			
30	109	土師器	直	637		7		ロクロ底 不明	ロクロ底 不明	SK104	3	口縁部のみ			
	110	土師器	直	635		6		ロクロ底	ロクロ底	SK101	3	口縁部のみ			
	111	土師器	直	(76)	5	不明		ロクロ底 不明	ロクロ底 不明	SK104		底部～体部のみ			
	112	直底器	坪	(58)			回転底切	ロクロ底	ロクロ底	G-3グリッフ F	6	底部のみ			
	113	直底器	坪	(64)			回転底切 ナガ	ロクロ底	ロクロ底	G-モグリッフ F		底部のみ			
	114	直底器	高台坪	(62)	5		回転底切 不明	ロクロ底	ロクロ底	H-モグリッフ		底部1/4のみ遺存			
30	115	直底器	坪	(54)	5		回転底切 ナガ	ロクロ底	ロクロ底	J-3グリッフ		底部1/4のみ遺存			
	116	直底器	坪	(33)	5		不明	ロクロ底	ロクロ底	X-モグリッフ		口縁部のみ乳土堆积			
	117	土師器	直	(60)	4		不明	ロクロ底 不明	ロクロ底 不明	G-モグリッフ		底部～体部のみ			
	118	青銅	圓			8				1-5グリッフ		体部小破片			

※()は指定値を示す。

※RP番号複数は複合を示す。

V まとめ

1 調査のまとめ

今回の調査は、狙い手育成基盤整備事業(大谷地区)にかかる緊急発掘調査として5月から7月までの2ヶ月で行われた。調査成果を要約すると次のようになる。

- 1) 昭和新田遺跡は山形県西村山郡大字馬神字北森に所在し、最上川左岸河岸段丘上の、南側に秋葉山橋跡、北側は大谷川支流の沢に接し自然堤防上に立地する。
- 2) 調査面積は7,800m²で、小柱穴を含む1,500基を超える遺構が検出され、コンテナにして21箱、破片総数1,521点の土器を含む総数1,900点以上の遺物が出土した。遺物の中では特に中世の壺器系陶器壺が出土し、県内では初めて個体として復元された。
- 3) 検出された遺構から平安時代の竪穴住居8棟を伴う集落と、掘立柱建物跡を中心とした中世の集落の二つの時期があることが確認された。

以下はまとめとして遺跡の各時期にみられる変遷と性格について述べてみたい。

2 遺構の変遷と性格

平安時代

平安時代（9世紀後半）は大谷川の支流にそった自然堤防上に竪穴住居を基にした集落を形成していた。当該期の遺構は、竪穴住居跡、土坑、溝状遺構等が検出されている。住居の規模は3m強と小規模である。特徴的なのは、同じ位置に主軸をずらしながら切り合っていたり、S T10ではカマドを南側から東側に付け替えていたりと、建て替えやカマドの補修等を行なっていたことが確認された点である。更にS T10では、側柱穴と床面出土須恵器が接合した事実から柱の抜き取りが行われ住居が廃絶したことわかっている。集落全体としては、遺物の状況から9世紀後半の一時期に集落を形成していたと考えられるが、10世紀以降に継続していたかどうかを判断できる資料は出土していない。更に、S K104やS K528では小規模の土坑の中に多くの完形土器が含まれていたことも特徴的であろう。地鎮の祭祀に関わるとも考えられるが、周囲に関連遺構が検出できなかったことから類推の域を出ない。

中世

中世になると庇付の掘立柱建物跡を中心とした建物群が出現する。全てが同時期に存在したかどうかは課題の残るところであるが、少なくともS B21と同規模の庇付建物が確認できなかつたことから、S B21を中心として掘立柱建物跡群が成立していたと考えてよいだろう。

遺物としては壺器系壺（R P 4）と青磁碗の小破片2点のみであったため年代を特定することはできない。但し、R P 4の出土地点がS E101に近く、その形状からS E101は中世の井戸跡と考えられ、当時の建物と井戸との関連を考える上で興味が持てる。

更に、南側には秋葉山橋跡がそびえており、今後は遺構との関連性を議論の対象にしていくべきであろう。現在のところ秋葉山橋跡の時期は戦国期のものと推測されているに過ぎず、遺物を伴って実証的に解明されているとはいえない。橋跡はその形状を含めて体系的な編年によ

る位置づけが必要であり、本遺跡の存在との関わりはその後に明らかにされるべきであると考える。

3 本遺跡出土瓷器系陶器と太平洋岸域出土瓷器系陶器の比較検討

S E105出土瓷器系陶器について観察結果から若干の考察を加えたい。

現在まで山形県内でまとまった形での瓷器系陶器が出土している報告はなく、さらに復元できたという前例はない。また、中世窯の分布域からは太平洋側で瓷器系が圧倒的に多く、日本海側では越前地方を中心とした地域に展開するのみで、日本海側の東北地方では瓷器系窯跡の確認例はない。珠洲系の圧倒的な優勢下に推移しているのが現状である。

そこで、太平洋側で代表的な瓷器系窯跡である、宮城県白石市一本杉窯跡及び築館町熊狩A遺跡の出土遺物との比較を行う機会を得、検討を加えたが産地を特定しうるには至らなかつた。

熊狩A遺跡出土窯は口縁部内面に明瞭な受け口をつくりそこに沈線を配する点、体部が肩口と下間に稜線で3分割された成形痕がみえる点等、明らかに本遺跡出土品とは一線を画す。

一本杉窯跡出土窯との比較では、口縁形状やプロポーションが14世紀初頭の一本杉窯跡生産品と酷似していたが、差異も認められることから、産地を特定するに至っていない。現在調査済みの窯跡には同じ胎土を有する遺物が出土していないこと、容積を含め同法量品が存在しないこと、本遺跡出土瓷器系陶器の胎土の方が緻密であり、鉄分の吹き出しもない均質な胎土であったことから一本杉窯跡産ではないことは確実である。また、胎土中に常滑産に見られる長石の含有はほとんど観察できなかつた。

但し、口縁部のつくり出しやプロポーションの酷似性は注目するに値し、製作そのものが、白石系の工人の手による可能性は残されていよう。

したがって、現在のところ考えられることとして、本遺跡出土品は消費地からの出土資料であり、太平洋側白石近辺の未調査窯からの流入と考えるか、もしくは在地産の未発見窯での白石系工人の手によって生産されたかであると思われる。しかしながらどちらも現時点では推測の域を出ない。これについては、山形県での中世瓷器系窯跡の存在も含めて、今後各地域での窯跡調査が進み資料が蓄積されることによって結論が出ると思われる。

主な参考文献

- 菅井道・大岡安太郎他1988『朝日町の歴史』朝日町教育委員会
- 坂村均・荷地造夫他1997『東北地方の在地土器・陶磁器 I』東北中世考古学会第3回研究大会資料
- 工藤雅樹・藤田邦彦・小丹川和夫1979『熙符八窯跡発掘調査報告』東北歴史資料館 資料集 I
- 古川康輔1981『北陸・東北の中世陶器とめぐら問題』『庄内考古学』第18号
- 佐藤寅吉1981『山形県の中世陶器について』『庄内考古学』第18号
- 山形県教育委員会1996『山形県中世城跡遺跡調査報告書』第二集(村山地)
- 北島教蔵他1984『大江町史』大江町教育委員会
- 山形県教育委員会1996『分布調査報告書(23)』山形県埋文化財調査報告書第197集

報告書抄録

ふりがな	しょうわしんでんいせきはくつちょうさほうこくしょ
書名	昭和新田遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第54集
編著者名	佐竹桂一 宮地文七
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL023-672-5301
発行年月日	1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
昭和新田遺跡	山形県 西村山郡 朝日町 大字馬神 字北森	6323	平成8年 度登録	38度 20分 44秒	140度 7分 32秒	19970507 ~ 19970718	7,800	担い手育成 基盤整備事業 (大谷地区)

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	平安時代	堅穴住居 土坑 溝状遺構	8 須恵器(壺、甕) 7 土師器(壺、甕、碗) 3 鉄製品(刀子1)	小規模な堅穴住跡が4棟切り合う状態で検出。朝日町では初めて古代集落の存在が確認された。
	中世	掘立柱建物 井戸 溝状遺構 小柱穴群	8 瓷器系陶器(甕1) 3 青磁(碗小破片3) 7 木製品(井戸部材31)	三面庇の掘立柱建物跡を中心とした掘立柱建物跡群を検出。瓷器系陶器甕を復元。 (出土箱数:21)

図 版



調査区全景(上空北から後方に秋葉山を望む)



鋸入れ式(西から)



調査区設定作業風景(西から)



重機導入　表土除去作業風景(西から)



グリッド設定作業風景(南から)

図版 2



面整理作業風景(東南から)



S T 9・S T 10縦穴住居跡調査風景(南から)



実測作業風景(北から)



調査説明会風景 於秋葉山交遊館



1区基本層序(北から)



2区基本層序(東から)



3区基本層序(西から)



3区遺構検出状況(北西から)



ST 1 内遺物出土状況(北から)



ST 1 内 R P 13-14-15出土状況(北から)



ST 1 内 E L 121遺物出土状況(北から)



ST 1 内 E L 121土層断面(西から)



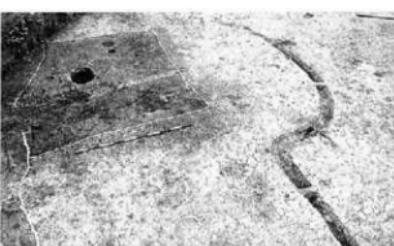
ST 1 内 E L 121完掘状況(北から)



ST 1 完掘状況(北から)



ST 2 検出状況及び土層断面(南西から)



ST 2・3 及び SD 123完掘状況(南から)

図版4



ST 4 内遺物出土状況(北から)



ST 4 内 E K 147 遺物 (R P 75, 160) 出土状況(北東から)



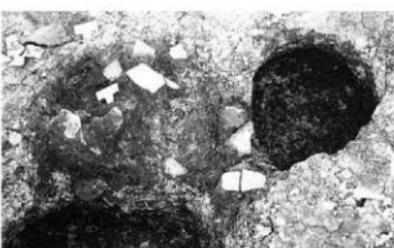
ST 4 内 R P 53 出土状況(東から)



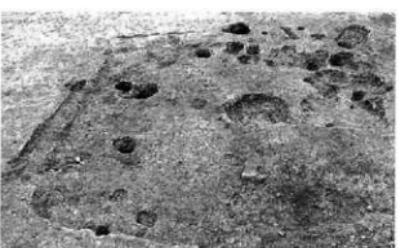
ST 5 内 E K 543 R P 164 出土状況(西から)



ST 5 内 R P 73 出土状況(南東から)



ST 6 内 E K 531 R P 162 出土状況(西から)



ST 4・5・6 完掘状況(北から)



ST 4・5・6・8 完掘状況(南西から)



S T 10遺物出土状況(東から)



S T 10内 R P 38・39出土状況(南西から)



S T 10内 E L 120遺物出土状況(北西から)



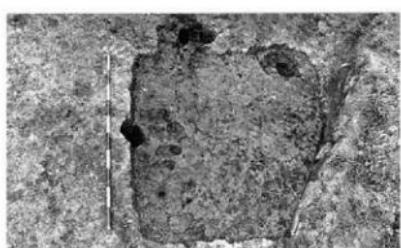
S T 10内 E L 120-214検出状況(東から)



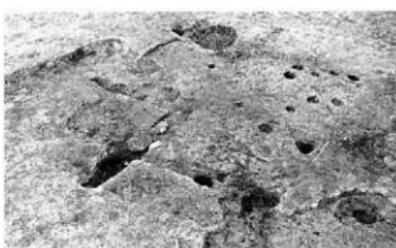
S T 10内 R P 29-36出土状況(南西から)



S T 10内 E P 216完掘及びR P 25出土状況(西から)



S T 9完掘状況(北東から)



S T 10完掘状況(北東から)

図版 6



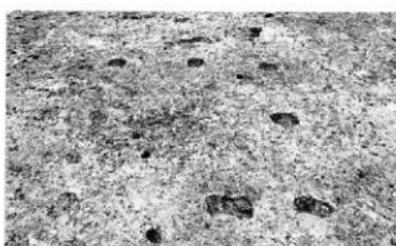
S B 21掘立柱建物跡検出状況(西から)



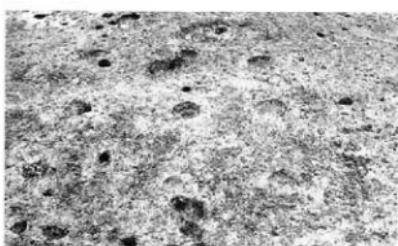
S B 21内 E B 41土層断面(南から)



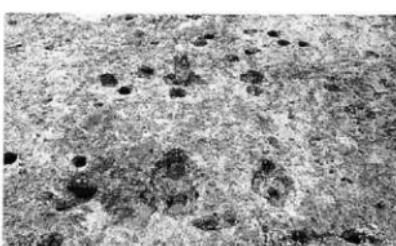
S B 22内 E B 70土層断面(北から)



S B 23完掘状況(南から)



S B 24完掘状況(南から)



S B 26完掘状況(南西から)



S B 28完掘状況(南から)



S B 29完掘状況(西から)



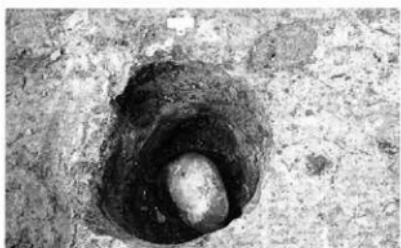
S T 4・5・6・8 及び S B 21・22・25 完掘状況(上空から)



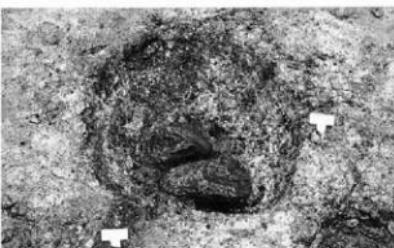
S B 29内 E B 193 完掘状況(南から)



S B 29内 E B 194 完掘状況(東から)

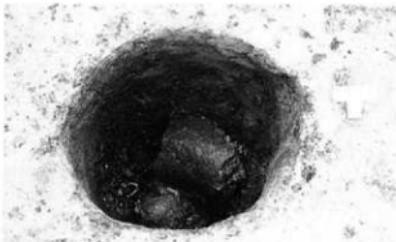


S P 231 完掘及び根固め石出土状況(南から)



S P 298 内根固め石出土状況(南から)

図版 8



S P 401根固め石出土状況(南から)



S P 408根固め石出土状況(西から)



S E 116土層断面(南から)



S E 116完掘状況(南から)



S E 105上層土層断面(南から)



S E 105内R P 4出土状況(東から)



S E 105下層土層断面(南から)



S E 101土層断面及び砾出土状況(南から)



S E 101内縫出土状況(南から)



S E 101井戸部材出土状況(東から)



S E 101完掘状況(東から)



S E 101東半部部材出土状況(西から)



S E 101北半部RW 102杭打ち込み状況(南から)

図版10



S E 101及び柱穴群完掘状況(上空から)



S E 101、S D 102-106切り合い検出状況(南から)



S D 106-102切合土層断面(南西から)



S D 117土層断面(東から)



S D 554完掘状況(東から)



S D 123 R P 51出土状況(西から)



1区 S D 118完掘状況(南から)



SK 104内R P 2・3出土状況(南から)



SK 104内遺物出土状況(西から)



SK 107土層断面及びR P 5出土状況(西から)



SK 528内R P 157, 158出土状況(北東から)



SK 525内R P 43出土状況(南から)



SP 157内R P 81出土状況(南西から)



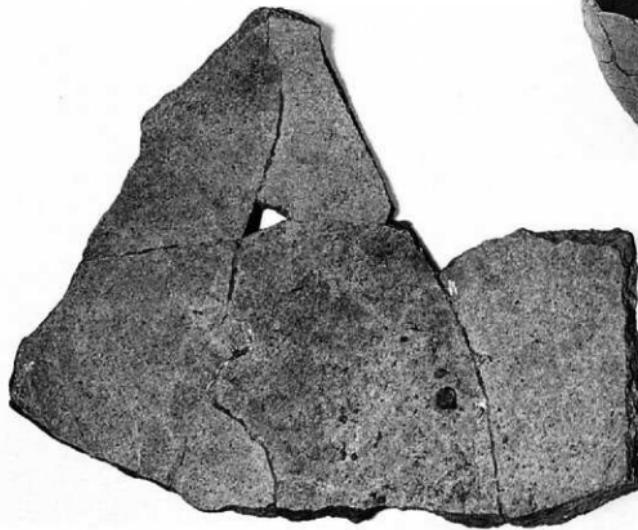
S A 31付近の小柱穴群(上空から)



S A 31完掘状況(北西から)



1



1



6



5



4



9



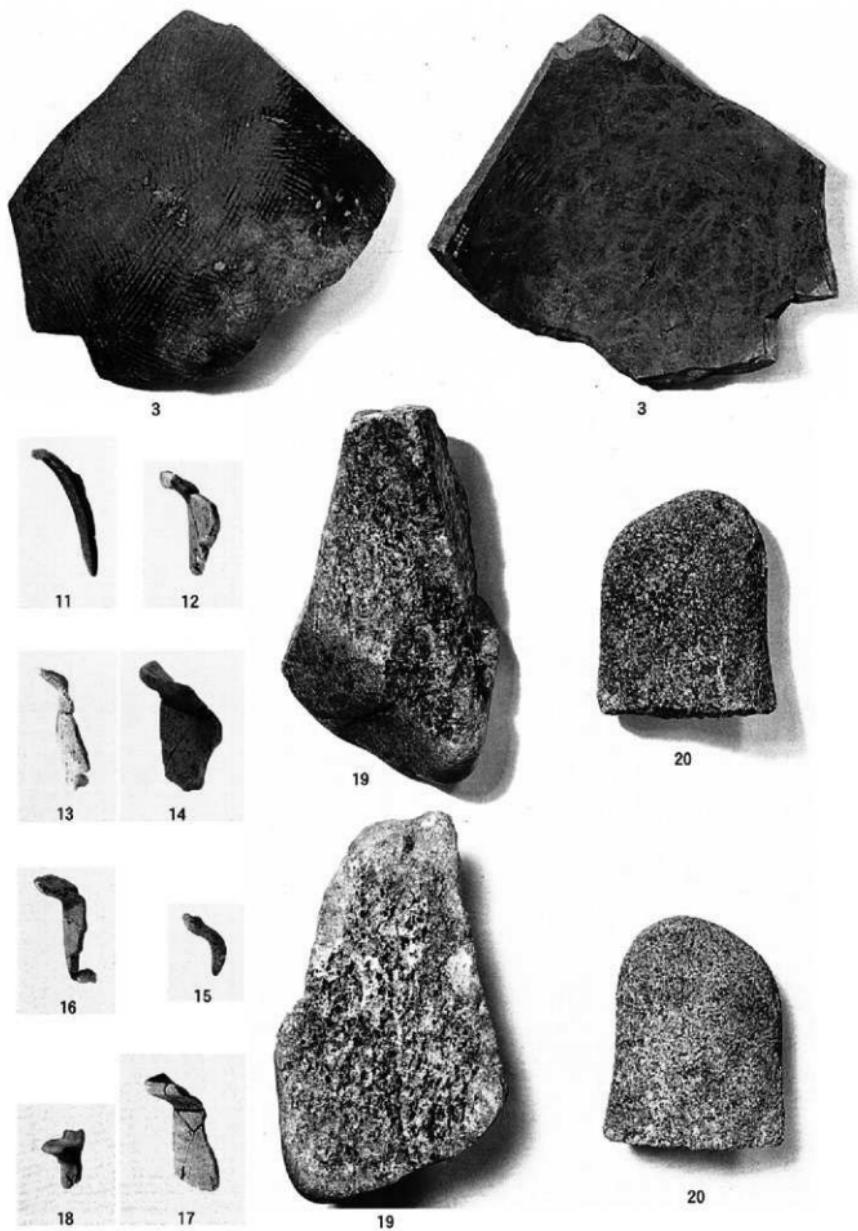
10



7



8





2



2



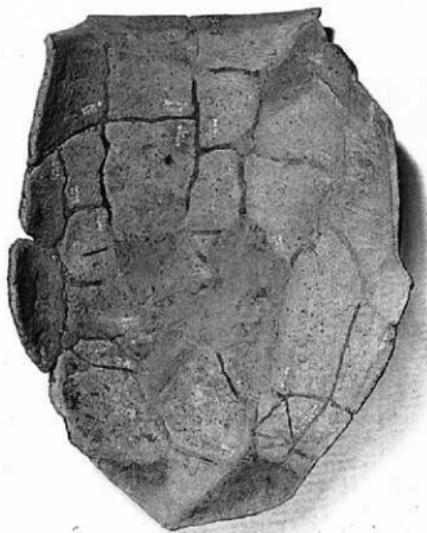
52



52



53



53



57



58



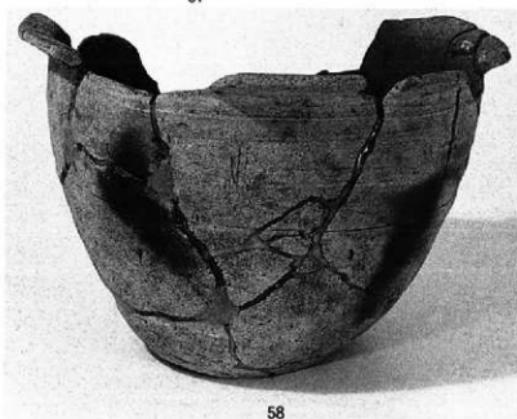
54



55



56



59



60



61



62



63



64



65



66

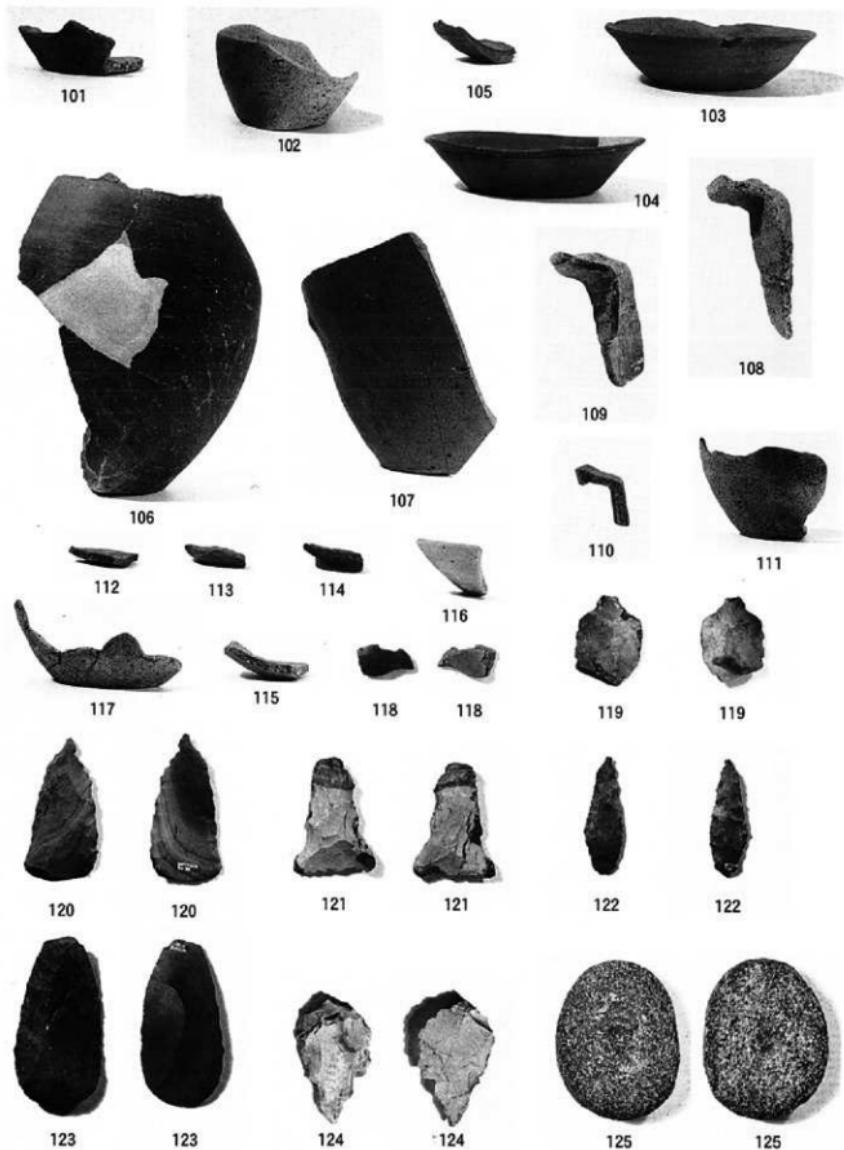


67

68



图版18





70



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80



81



82

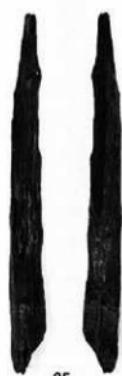


83

図版20



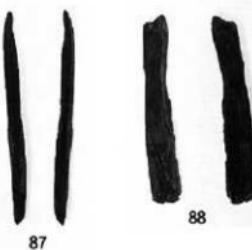
84



85



86

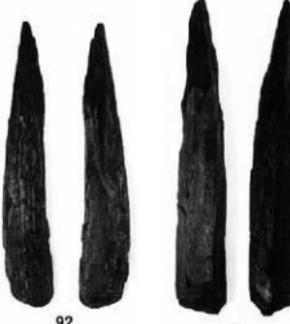


87

88



90



91

92

93

94

95



96



97

98

99

100

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第54集

昭和新田遺跡発掘調査報告書

1998年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 023-672-5301

印刷 藤庄印刷株式会社
